



《2021年発行小説集・R18》サンプル約5万5千文字

いば神円(しんえん)

サンプルは約5万5千文字。

2021年の販売12作品に書下ろしプラス

合計、約45万文字・全編1834P、本編1726P キヤラ絵等無し

R内容は全体的にマニアック寄り。ハート喘ぎ、放尿、嘔吐、食ザー、放尿、GL、TS、逆NL表現、ふたなり、男オナニー、アナル、触手、複数など有。

1・【触手ぱにつく!】

(女神は踊る・まっば☆褐色エルフ♂)

2・【スライムぱにつく!】GL

(リリカの憂鬱 前編・後編・スライム排泄)

3・【傲慢獅子に疲れたノノ先生はスライムマッサージで癒される】

(本編・痴漢列車GO☆GO☆(IQ3))

4・【寂しがり屋の親友の睡眠姦】

5・【水着おっぱい倫理観】

(本編・その後の話)

6・【流されアシュリー】

7・【すっぱかされ海水浴を独りエンジョイしてたら種付けされた】

8・【元聖人と劣化版スキル使いはダンジョンで生きていく】

9・【死して概念になり世界の平穏を見届けた先で死の前へと生還す】

(前編R15G+・後編R18)

10・【サキュバスの食欲】TS

(八話構成)

11・【社畜がある日アリスになった二】

(《猫と番になって帽子屋で飼われたアリス》前編・後編・《妄信豚の飢餓欲

情》・㊦ チエシヤ猫《飼い猫散歩と新たな住人》・帽子屋《愛すべきコレク
ション》)

12・【社畜がある日アリスになった㊮】

(《豚の祈りと平凡な紳士》・《豚の讃美歌》・㊦《豚と兎と蜥蜴の独断場》)

13・【木の精霊の媚薬】

(書下ろし作品)

【触手ぱにつく!】女神は踊る

【登場人物】

主人公…ニア

人間族。茶髪、茶色い瞳。可愛らしい明るい穏やかな女の子。

一人称、私

お相手…バルガ

ガチの獣型、狼獣人。全体の黄金色の毛色の中心縦に灰色の毛色、灰色の尻尾。灰色の瞳。背が高く大きい。

一人称、僕

*

その日、私は入りたての商人組合の研修期間の一つとして世界各地にある地下洞、不可道、迷宮の一つ、総称「ダンジョン」の核が一団隊の護兵の手によって取られて間もないダンジョンへと潜る事となった。

『春の獣人には近づくもんじゃない』

そんな言葉を耳にした事がある。その根拠たるものはなんなのか現在、斜め前を先導して歩く獣人に目が向く。

狼、犬？

獣人といっても種類は多々あるとは聞いたが狼系と犬系は違うらしく聞く時に慎重にならなければ気分を害させる事があるらしい。

「……」

パンを上手く焼けた時の黄金色に似ている全身の毛色と頭の天辺から背中に向かって生える灰色の毛。腰の辺りから下げられている灰色の尻尾。それが、ふりふりと薄暗い洞窟の中で揺れている。

正直、どちらかわからない。

とはいって別段どちらであろうと彼が良い人だという事は、ひしひしと感じるので嫌われる事にならなければ、どちらでも良い。

彼が手首の両腕輪に着ける魔法石の淡い光が洞窟を照らす光を強くする。彼の魔力の調節次第で光の調度が変わるようだ。

「ニアちゃん」

「はい、バルガ先輩……!」

声をかけられ慌てて顔を上げて彼を見上げる。獣人の彼は背が高いし大きい。見下げられると少し緊張した。

「この上階、三階までは完全に掃除されていて魔物は出ないけれど次の四階からは少しづつ出てくると思うから気をつけてね」

「は、はい!」

「まあ、そんな強い敵じゃないし物理だけで、どうとでもなるだろうけど何事

も命が懸かっていると思って、どうか慎重に」

「りよ、了解です！ バルガ先輩！」

「うん、良い返事」

ニカツと笑う獣独特の大きな口が、なんとも可愛いなつと四階に下りながら気を緩めてしまう私がいて駄目だと思い両手で自分の頬を大きく叩くと彼、バルガ先輩が目を真ん丸に見開いて振り向き私を見る。

「……気合いをいれました」

自分の最大限の真面目な顔でそう言えばバルガ先輩の目元が細く緩み喉を鳴らす。

「可愛いなあ」

「へ」

今度は私が見開いて驚く番だったがバルガ先輩はそれだけ言うと前に顔を向き直し私を先導していく。

少し、頬の痛み以外にも頬が朱くなっているような気がした。

今年の春前、冬の終わりに王都市隣から三つ離れた中型規模の街にある商人組合へと就職した。私の主な能力は回復、補助、鑑定。現在は錬金術も勉強中だが産まれながら血に宿していた鑑定技能とは違い錬金術の方は早くて五年、遅ければ何十年とかかってしまうだろう。ただ鑑定技能に関しては見て触れて調べるという鑑定の行動をすれば無い相手と比べると十倍は吸収速度が早いらしい。

とてもじゃないが田舎出身の私が大きく安定した給金をもらえる職場に就職

するには、それが無ければあり得なかった事だろう。女神の采配を天使が手を滑らして血筋にもない突然変異を私にもたらしただけでこうして職にありつける事ができた。とても、とても感謝である。

「我々に慈悲の壁を与えたまえ」

一定期間で効果が切れてしまう補助魔法をかけなおしながら彼が倒した魔物を見て小さく片手で額で作る三角の祈りを捧げる。バルガ先輩は私のもたもたした行動を咎める事無く素早く魔物の皮を剥ぎ個々になっていない現物の部品名を一つ一つ呟いていく。私はそれを鑑定を発動させながら聴き記憶を鮮明に作り上げていく。

「次は、最初になるからキツいと思うけど一緒に捌く作業をするね」

「はい」

私は頷く。

「じゃあ、これは袋に一端しまって……」

彼が開いた腰元の魔道具の袋は、本人の魔力の力量によって違うが空間に袋より多い物量を重さは袋の分だけにして、そのまま入れられる便利な代物だ。

野ネズミの見た目をした頭より一回り大きい一本角の生えたネズミの魔物は捌かれて彼の袋の中に綺麗に収まった。次は私が弱小魔物の「ネボル」を捌き身をもつて鑑定する。実際は、ここまでしなくてもネボルの細かい鑑定は把握できているのだが、これが商人ギルドの研修期間といえる誰しもが通る道らしい。

実際、出張や派遣とうで出かけ血生臭い、その姿を目の前に鑑定を行う事も多々あるそうなので、これが、どうしても無理なら鑑定士の部署は辞めるべきだと面接時に言われた。

だが、むしろコレは大丈夫。『屠殺』は実家の牧場の飼育動物でもよくあった事だ。悲鳴をあげる程の神経の細さはない。

受付女でも半鑑定として軽い商品の相手をする事も可能らしいのだが受かり

一年もすれば給金は鑑定士の場合、倍になる。それだけ信用や技術も必要になってくるが、このまま天使の、おっちょこちょいを最大限に使い幼い兄弟の多い田舎の家族に仕送りを送るのが現在の目標だ。

「新人の子で、こんなに綺麗に捌くのを見たのは初めてだよ」

バルガ先輩が私の一連の作業を眺め、そう言ってくれたので実家の牧場での屠殺の事を、ぽつぽつと話す。

「なるほど。ニアちゃんは護兵の相棒としても人気が出そうだね」

「そ、そうですか……?」

袋から魔道具の水筒を取り出すバルガ先輩。ダンジョンへ潜る前に支給された水の係属の魔石をはめた水筒を傾けてくれる彼を見上げ、むず痒いような気持ちで言葉を返す。

「うん。前の僕なら先早に君を引き入れるよ」

「前……バルガ先輩は護兵を勤めてらしたんですか?」

魔石が溶けて無くなるまでは飲み水として使える水が出る魔道具の水筒は現在の私には買えるような品ではない。しかしながら給料が出たら、是非とも欲しい品だ。

「そう。まあ……勤めていたというよりは巢立ちにあたって自然の成り行きで、そうなっていたただけだけれど」

手を綺麗に洗い終わり。バルガ先輩は袋から布を一枚取り出して渡してくれる。

「ありがとうございます」

頭を下げて受け取ると低い喉を鳴らす笑い声が耳に入り込む。

「研修が終わった後も出張回りでは是非ともむさ苦しい雄じゃなくニアちゃんと組みたいからね。今の内に僕は媚びを売っておくよ」

「ふふ」

口端を大きく上にして目を細めた笑顔で、そんな事を言ってくれるので、も

う嬉しくてたまらない。

「まあさ。春になって、もうすぐ女神が踊り始めるから僕らは強制的に短くても二週間は顔を会わせれなくなるけれど……あ、三匹」

鼻を鳴らした彼の仕草は実家の牧場犬を思い出す。バルガ先輩は、しつぽをふりふりと揺らして補助しかできない私の代わりに腰の中剣を抜き現れたネボルをしとめてくれた。

五階の奥深くまで来て、これ以上の下の方階は本職の方々が妥当な層になると

の事で、掃除が終わっている奥の小部屋で一度休憩し上に戻る事となった。地上に戻れば一応の実習研修は終わりらしい。他にも研修はあるが、とりあえずは明日は休みで明後日の午後ここでの内容の報告書を提出する。その事を考えると緊張するが、きつと良いモノが書けるはず。何事も前向きな気持ちでいた方がいい。

自分の袋から前日焼いて作っておいた少し堅い大きな牛乳パンの間に薫製の豚肉とチーズと甘酸っぱいタレを塗っただけのモノを挟んだパンを取り出して目の前の用意した薪に網を置き当てる。それと水の水筒とは別に持ってきていた太い筒状のモノも出し蓋を開けてこちらは薪内に底の三分の一が埋まるよう引っかけ棒を使って直接置く。水筒の水を少し入れて木の匙で混ぜながら焦げないようにしていると隣からゴクリとした唾を飲み込むような音がした。

「干し肉と水じゃないんだね……」

「え」

隣を見ると彼の手の平には薄い干し肉が数枚。水の水筒一つ。

「……ご飯は各自で用意するようにと通知をもらったので、てつきり…だ、だめでしたか……?」

ダンジョンの中での簡易食では必ず干し肉という決まり事でもあるのだろう。そうになると、これは原点対象?

「え?」

「よくよく考えると魔物と遭遇するかもしれない中で、のんびりと支度をするなんて……」

「いや、全然、いいんだよ別に。場所によっては無理だけど決まってるから!」
「気を使わせているのでしたら……」

「ややや! ただ、美味しそうだな干し肉以外で羨ましいなって思ったら口についでただけで大丈夫だから!」

「……!」

はっとしてバルガ先輩の干し肉を見つめる。

「……バルガ先輩、よければなのですが」

「え？ うん」

「この煮込みは野菜しか入っていないので、その干し肉を入れさしてもらえないでしょうか。もちろんお返しに半分お渡しします」

「え！ いいの!? やったー!」

干し肉を渡してくれるバルガ先輩。それを、ちぎりちぎりと、ちぎって入れて。火で炙ったパンは小型刃物で半分に切って袋から取り出した紙で巻いてバルガ先輩に差し出す。

「直接持つと熱いので……あ、溶けたチーズには気をつけて」

「は、はい!」

バルガ先輩の耳がびこびこ動き尻尾が背中の後ろで、ぶんぶん揺れている。それを見ると、どうも嬉しくて私は筒の蓋の方に煮込みを入れて本体の方をバ

ルガ先輩に木の匙ごと差し出す。

「え! こっち? え、いいの?」

「はい。私もバルガ先輩に媚びを売っておこうかと思ひまして」

「ふはっ」

バルガ先輩は耳をぴんつと立たせて目を真ん丸に見開き少し固まると次の瞬間には嬉しそうに口端を大きく上げて目を細め喉を鳴らしてグルグル笑う。

「ニーアちゃん最高!」

ガツガツと温まったご飯を食べるバルガ先輩。火傷はしないかと最初はハラハラしながら見ていたけれど、どうやら大丈夫らしい。私も匙と一緒に持つてきていた木の三又匙の方で煮込み具材を食べパンを食べる。

「そういえば……」

「ん?」

食べ終わって小型の薬缶で湯を作り木の器に茶の粉を入れて一服している時、

ふと、さつき途中になって気になっていた言葉を思い出す。

「女神が踊るとは、どういう意味なんですか」

「へ……?」

目を細めてお茶を飲んでいた彼の表情が驚いたつとといったものになる。

「知らなかったの!」

「はい」

頷いてお茶を一口。

「ここら辺、一帯の風習か何かですか? お休みになるんですよね?」

「あー……うん、よほど腕に自信があるか護衛がない限りは雌は外に出るのは禁止されるね」

「雌ですか……? じゃあ、バルガ先輩は外に?」

「……そう、うん……期が来ると気づいたら夜は特に、たまらなくなって走り回るかな……」

「走る……? 運動の大会のような……?」

「……ある意味」

お茶をゴクリと喉に流し込むバルガ先輩の耳や尻尾が、なにやら、それぞれと動いている。走りたくなつたのだろうか。実家の牧場犬は走るのが大好きだ。

「楽しそうな響きですが女性としてはいけないお祭りなんですネ」

お茶のお代わりを作るために二人の器に入れて、お湯が無くなつたので再度、水筒から水を入れてお湯を作る。

「……祭り……う、ぐ、ぐ」

グルグルつと何か苦しそうに喉を鳴らすバルガ先輩。

「……正確には……雌と雄がするものでして……」

「え? そうなんですか。じゃあ、私も出来たりは……」

「へ!? ニーアちゃんが!? だ、駄目だよ!」

「駄目ですか……そうですね。流石に私、夜走り回るほどの体力は……」

「はし……ふは、走るのは僕というか……むしろ僕が動かす、の、かな……」

「バルガ先輩が……?」

二週間もお休みになる程の祭りは、どうも聴くかぎり未知数だ。私の田舎の家は、一番近いご近所さんが牧場や幾つもの畑の先のような場所だった所為か常識を把握しきれていない部分がある。できれば、この知らない情報を正確に早めに理解しておきたい。

バルガ先輩の灰色の瞳をじっと見上げ。

「すみませんバルガ先輩。聞けば聞くほど謎が……その、それを、今、もう少し詳しく教えてもらえたら嬉しいのですが……」

「……は」

バルガ先輩が瞼を睨り何故か耳をぺたんと畳んで顔を両手で塞ぐ。しかしながら尻尾は不思議と大きく揺れている。

「バルガ先輩……?」

「……ニアちゃん」

「……はい」

顔を塞ぎながら喉から唸り声を漏らし低く呟く彼の様は耳や尻尾がなければ、とても怖い雰囲気だ。怒っているのだろうか。怒っているとして何が原因なのだろうか。

——……どうしよう……

心の中でジワジワと焦っているとバルガ先輩が言葉を向けてきた。

「……狼の前に美味しそうな羊が狼を肉食だと思わずに、ご飯を誘ってくる場合、狼はどう答えると思う?」

「え……なぞなぞですか……えーっと、私が狼なら、ご飯と一緒に行って、とてもお腹が空いていたら羊を食べてしまいますね」

「……だよね」

「はい」

「……」

沈黙。

なぞなぞの答えは無いのだろうか。少々、寂しい。

あと気まずい。

どうしたものか。

黙り込んでしまったバルガ先輩の耳や尻尾をしばし眺めていたら、またお湯が沸いたので今度は直接、薬缶の方にお茶の葉を入れて火から下ろし冷ます。薬缶を置いた石の床面からジュウツとした音が鳴った。

バルガ先輩が静かになつて予想外に暇になつてしまった。そろそろ薪とうの掃除をして帰るべきだろうが促していいものか。何か深く悩むバルガ先輩を一瞥。もう少し待って声をかけよう。

その間、魔法石が埋まる壁を眺める。ダンジョン内の壁や床から取れるのは魔法石。魔物から取れるのは魔石。比較的、魔石は手に入りやすいので、この

水筒の様に日常の生活用品として使われやすい。魔法石は、もっと、武器や防具の材料や家や街の保護材料に使われる事が多い。

——……あれ……？

何気なく部屋内を眺めていた視線が止まる。ダンジョン特有の魔物の住まう部屋ではないし突き当りで小さい部屋、特に何もない部屋だと判断していた。ふらりと立ち上がって悩むバルガ先輩を通り過ぎゴロゴロとした丸石が隅に固まるその場所にしゃがみ込み転がりそうな石を軽く押してみる。

ごろり。

目の前のネボル三匹分ぐらいの大きさの石は簡単に横に転がった。

「……穴」

穴だ。

転がった石があつた場所には穴がある。ネボル二匹半といたぐらいの大ききの穴だ。

「……加護の光を我のこの手に与えたまえ」

元々探索にあたつて照明になる光の付属は一部に付けていたが、この暗い横穴を調べるには、もう少し明かりが必要だと思つた。

ずり。

ちよつとした好奇心だ。危険なダンジョンだとしても、もう掃除の終わった部屋の、それも核が取られて魔物が、これ以上は増える心配のないダンジョンだ。油断は禁物という警戒心よりも、これぐらいの小さな横穴なら大丈夫だろ

うと好奇心が勝る。手を伸ばし中を探ってみる心は、どうもどうも浮かれていて。ダンジョンの小部屋の横穴。何もないかもしれないし、もしかしたら何かあるかもしれない。

——……宝箱とかあったり……

奥を覗き見て。

「……………」

まさかと思う。思うが、そのまさかだ。

——……宝箱だ……………!

深く暗い穴の奥には蔓にぐるぐると巻かれた小さな宝箱が一つ。ネボルより

一回り小さい大きさだろうか。しゃがんだ体制のまま腕を伸ばした状態でバルが先輩に顔を向けて声をかける。

「先輩！ バルが先輩！ 奥！ 奥に宝箱がありますよ！」

「え……？」

今だ悩んでいる様子だった彼は顔を上げ。私に目を向けると驚いた顔で身を起こす。反射的に動き出したバルが先輩を見て彼も宝箱に心躍っているのだと思った。

「凄いですね！ ダンジョンって本当に宝箱が……」

興奮気味にそこまで言って身体が、がくりと均衡を無くす。

「!？」

わけもわからず動かなくなった両腕。否、動きにくくなった両腕に目を向ける。倒れた身体は自分の意志とは関係なく穴奥へ向かっていく。宝箱に巻き付いていたであろう蔓が何故か私の両腕に巻き付いていて。私を奥に引きずり込

んでいく。

「へ、うそ、や」

「ニーア!」

バルガ先輩が私の名前を呼び、まだ穴に入っていない胸元から私を抱くように掴み引く張る。

「ひ、う、わ」

痛い。

腕に巻き付く蔓はどんどん増え、私の二の腕まで巻き付き始めている。

「プラントか! くそ……なんで五階に……」

焦ったバルガ先輩の声に頭が真っ白くなる。

罪悪感や謝罪が身の内を駆け回り、プラントの強い力に恐怖が、ただただ膨れ上がる。

【プラント】

名前は図鑑で見た事がある。触手を使って獲物を捕まえる植物型の魔物の総称だ。それには色々と種類があるらしいが大抵は植物系の階層に産まれる魔物で、この石ばかりの階層に産まれるというのは滅多にない。あるとすれば別階層から他の魔物に寄生して、その種を持った魔物が別の階層で上手く床となり安全に成長する事ができた場合のみ。

プラントは完全に成長してしまえば強いが、その成長過程を邪魔されると非常に脆く弱い。

そしてこれは。

「うつ」

頬に触手が当たる。鈍い緑の表面と内側の鈍い小豆色の面が無情にも自分の灯した明かりでよく見える。

一度視覚にとどめてしまえば全貌が、ありありと見えてくる。

奥の空間に広がるプラントの塊。

安全に成長しきったプラント。

鈍い緑色の皮をもった鈍い小豆色の植物の蔓に似たそれは内側程生々しい色合いで全体的にヌメヌメとした液体を垂らしている。

私の腕も液体でヌルヌルだ。

ずるずるずる。

プラントの触手はバルガ先輩の腕の方にも身を伸ばし。多分向こうで一悶着あったのだろう。隙を狙うように引きずられ私の身体は彼から引き剥がされ腰元まで横穴の中へ埋まる。

「ひい」

情けない引き攣った叫びを上げた私の口に何を思うのか思考があるのかは不明だが触手が口へ入り込む。鼻にも入ったら窒息するだろうかと思いつながら口

事態も大変、厳しく。親指二本分ほどの大きさの二本の触手が私の口内で動き回り涎がだらだらと垂れるし嘔吐く。

——……し、しぬ……

触手に鼻を塞がれても終わりだし首を絞められても終わりだし、もしかしたら耳や目の中に深く入ってきても終わりかもしれない。それを言うなら今の口の中のものも、これ以上入り込めば。

「……う、ぐ、う」

なんとも拷問染みた最期を想像し涙が零れる。ダンジョンという場所ですでかした愚行。油断と無謀と好奇心。なんつてことだ。今なら、すごい報告書が書ける気がしてきた。

しかしながら予想と反し、バルガ先輩が止める前に私は腰元以上は引きずられる事無く止まり。触手も動きは雑だが思っていた拷問死をしてこない。引きずりは宝箱奥の空洞が見えた時点で、もう良いと判断されたのか私の尻が単純にデカくて止まったのか。プラントは首にも巻き付きくが締め切る事はなく軽い拘束をし私の口を開いては何かヌルヌルとした触手の先から液体を入れ込む。

——…気持ち悪い…

ねつとりとした液体。妙に甘く、喉に張り付く。その液体が有無をいわずに流し込まれ出来るだけ吐こうとすればするほど喉を通つて身の中に入つてしまふ。口端から沢山、溢れても止まる氣配はない。

大量の液体は凶器だ。鼻がふさがっていなくても呼吸の間を間違えれば窒息が待っている。それに止まらない液体は、ジリジリと飲み込む限界を近づけ焦

る頭が熱い。

——……あつ……い……

そうだ。

熱くて熱くて苦しくて。

呼吸の乱で血が上り全力疾走をした身体のように力が抜ける。

動けずとも暴れていた身体が疲れてガクガクと力が。

「……………」

抜けると身体全体の水分が溢れる感覚がした。汗も涙も涎も鼻水も排泄する器官からも。ヌルヌルした触手以外の液体が私の肌や服を濡らし下半身に、じわりとした温かみを広げた。その事に、とても恥ずかしいと思ったが、もう死にそうな身だ。どうしようもできない。

私の身体から力が抜けた為かプラントは少し蔓の力を弱めピチピチっと小さな音を鳴らした。プラントの全体の中心部に割れ目が生まれそこから我先にと出てきた細かい触手が円形状に広がったかと思うと。

にゆるりっ。

口から出した舌のように何か新しい触手が奥から頭を出してきた。中心部の粘ついた液体は量が多く、ぼちやぼちやと涎を垂らしている。食われるのかつと頭の中に想像が過った。伸ばしてくるその触手を力無く眺める。

出てきた、それは濃い小豆色で楕円形の開花する前の花の蕾の形とよく似ている。近づくにつれて蕾は肉厚な花びら部分を開いていく。その中を見れば蕾の中には少しイボイボした鶏の卵程の大きさのモノが入っており、他の触手で無理矢理開かれている口に開花した蕾の中のイボイボ卵が入ってくる。

「……………」

意識が朦朧としていたがイボイボ卵が開花した蕾から弾きとばされ啞内に入つて、ぷちゅつと音を立てて破裂した事には驚愕した。

ドドドツと心臓が音を立て脳内で警笛が鳴り響く。

しかし。

どるんつ。

なんとも重たい音を立てて液体の固まりが開花した触手の内側から啞内へと積みめられると焦りは消えていく。警笛は収まり心臓の音も静かになって。触手は啞内から、ずるりと抜けて反対に頭の回りに紐を巻くように触手を巻いて鼻で息は何とかできるが口を物理的に閉じられて触手の動きは鎮静化した。

ぷちりっ。

ぶちぶちぶちっ。

何かちぎれる音。

夢現な半分寝ている頭が一步遅れて、鈍い痛みのようなものを伝達してくるが今一つ痛いとは感じられない。

むしろ。

——…きもちい…

ずるるるるる。

「ニーア!」

狭い空洞から小部屋に戻ってきたらしい。触手が頭の周りに巻き付いてから閉じていた瞼を薄く開けて、ぼんやりと、ごつごつした部屋内を見る。その中に見知っている顔があり重い瞼を、もう少しだけ開けて眺めた。

「……やっぱり……この特徴は種を植え付ける寄生型か……!」

焦った様子で私を抱え部屋の内側へ運んだ彼は袋から出したのか厚い布板に私を置く。

「あの触手の感じからして消化系や麻酔系でないなら獲物を一定の間拘束したら逃がすはずとは思ったけど……えぐいな……」

刃物で私の頭周りの触手を切りながら彼は、そんな事を呟いている。

「……やはり、回復魔法を後でかけさえできれば腕を壊してでも最初の段階で出すべきだったか……」

独り言なのか私に話しかけているのか。焦った様子で作業をしながら怖い顔

で眩くバルガ先輩。

「いや……種の植え付けは上部部分なんだ。下半身じゃなかった事は運がいい……」
頭周りの触手を取り外すとバルガ先輩は私を俯かせ顔を布板からずれた部分の地面に向かせた。そのまま背後から私の腹部分に片腕を回し腹を深く押してきて片手で私の顎と顎の間の窪み部分を顔を挟むように押し口を開かせる。

しかし最後に入れられたプラントの液体の固まりは全く下に落ちる事無く、ただただ私の目や鼻や下半身から液体が押されて漏れ出るだけだ。口からは涎すら出る気配が無い。

「……………ごめん」

一時の間の後に顎を開かした手がずれ口に彼の指が入り込む。何かを掴み。
どるんっ。

三本指で捕まれた固い液体の固まりが彼の拳分、私の啞内から引き抜かれて少し離れた場所で燃える薪内に投げ捨てられた。じゅわつと音がした先を目で追っていれば、腹を押すさらなる圧迫感に今度は涎だけでなく色々なモノが出ていきそうになる。

「……がつ」

バルガ先輩は、また指を私の啞内に入れ届く指で、ぐいぐいと喉奥を押して私は腹と指の、それにたまらず吐き気を覚え、ゾワゾワとした感覚が身体の内側を回り。そのまま腹の中のモノを地面一帯に吐き出した。

「……げっう、うぐ……が……はっ」

酷い光景だ。

自分の汚物の惨状を目にして、ようやく頭の意識が楽になってきた。生理現象で鼻が盛大に詰まって外の臭いは曖昧だが自分の汚物で焼けた喉からくる、すっぱく苦い味は、なんとなく分かった。

「……ニーアちゃん、失礼するよ」

彼は私の汚物まみれの手を私の咥内に触れさせたまま片腕と足を器用に使い私を仰向かせる。

「種……残ってるね……」

咥内を指でいじり頬の裏に張り付いた彼のいう種を指先にひっかけ、ぐいぐいと内側から頬の形を変えられて少し痛みと、ぴりぴりとした気持ちよさを感じた。

「……下半身じゃない場合、男女共に穴の大きさを咥内のみになり胃の方に万が一進んでも胃液で溶かされて成長は免れるが咥内に誤って残しておくとプラントが産まれた事例がある」

「……ほ、う、なん、へ……」

『そうなんですか』と答えようとしたけれど彼の指が入っているので上手く喋れない。

「……」

「う……あ、う」

それに指が動く度に、どうも気持ちよさが増してきて身体が震えてくる。

「……ごめん……痛いとは思うけれど……」

「……いへ、だいじょ……きもひー……でう」

悲しそうな顔で言われたので大丈夫だと言ってみる。伝わっただろうか。

ぴたりっ。

「……」

動きが一時、止まったバルガ先輩は、ゆっくりと私を布板上に寝かせると、おもむろに立ち上がり薪に向かう。布板上で触手によつて頭以外は、まだ巻き付かれているので大した動きは出来ずにバルガ先輩を見つめた。

バルガ先輩は一部が燃えていない薪の一本を手につくと先程の横穴に向かい。
「陽の係属よ、その身の強さを見せよ」

バルガ先輩は回復や保護系の力は使えないと言っていたけれど他の能力は、
できるみたいだ。彼が、そう唱えると火は強さを増し身を増やしうねるように
して、その身を横穴に入れていく。

「……全て燃やし尽くせ」

そう呟きながら手に持っていた薪の方も投げ入れて私が最初に移動させた丸
い岩を掴み力一杯、横穴に叩き込む。横穴には輝が少し生まれ丸石は形が変わ
りながら彼の足裏に潰されてボロボロと横穴を塞ぐ。塞いだ先から、なにか甲
高い悲鳴のような音が聴こえた。

側に戻ってきた彼の耳はぴんつと立っていて心なしか毛が逆立っている様に見える。

ぱたんっ。

ぱたんっ。

彼の尻尾は一定の間隔で揺れている。

「……ニアちゃん」

「あ……い……」

バルガ先輩が私を布板に置いてから触手に巻き付かれて取れていない拘束の

感覚が妙に気になって動くと腹元の方は取れていくが腕の方は絡まりが強くなつた様な気がしていた。絡まったのだろうか。ずるずると身体の周りの触手の残骸を感じて体中のぴりぴりした感覚が甘く感じる。

——……きもちいよお……

腹元の触手の残骸を無言でバルガ先輩が引き抜いてくれた。

「あ、は……」

思わず漏れる声。涎が垂れる。

「……」

私の腰元に跨るようにして触手の残骸を取ったバルガ先輩の動く尻尾が私の服上から触れて直接肌に触れているわけではないのに身がくすぐったいような、ぞくぞくとした感覚をもたらした。

ひゅーひゅーつと息が漏れる合間に、ぱしりっぱしりつと尻尾が当たると身の内から勝手に声が漏れる。

「ひゃ、あ、あ……♡」

「……すごいにおいだ」

私の頭を間にして両手を置いたバルガ先輩が身を屈め犬のような彼の鼻先が私のベトベトに濡れた頭に触れた。

「知ってるかな……ニーアちゃん」

「ん……う……」

「寄生型のプラントの液体は度数の高いお酒と似ていてね……」

鼻先を私に付けて、ヒクヒクさせる彼のわずかな動きが私の身を震わせる。

「匂いだけでも僕らの思考を惑わすんだ」

額に彼の鼻先が触れ、ぐにぐにと私の顔の皮膚を押しながら乱れた髪の間に入り込む。もともと、それほど長くはないが肩少し下まで伸びる髪を結んでい

た紐は一連の間に無くなってしまったらしい。

「……酒のような刺激臭。それに……君の吐いたモノ。凄い臭いだよ」

「ひあ……」

頭の隅で羞恥という単語が流れるが耳に温かい吐息と共に直接流れる感覚が気になって頭の思考が追いつかない。

「さっきのご飯とお茶の美味しそうな匂いがするのに、すっぱくって苦い感じとプラントの甘ったるい匂いが混ざって気持ち悪くて……興奮する」

「う、う……」

「それにさ……」

彼の揺れている尻尾が私の無意識に擦り合わせる太股の中心部へ触れて。

「……君の……たまらない……未通の乳くさいここからさ、発情した雌の匂いが酷くて酷くて……もう、最高……っ」

バルガ先輩は言葉を発しながら緩く開いた口の合間から涎を垂らして、はー

はーっと温かい息を吐き身を軽く起こす。

「……は、はる……春なんだ……何もなければ……正式に……女神の踊りに君を……僕は……」

潤んでいる瞳で少し苦しそうに、そう呟く彼は私の吐いた汚物で汚れた片手を自身の口元に近づけ、ぺろぺろと舐め始める。

「……すっぱくて……にがくて……あまい……」

バルガ先輩は荒い息で何度か深く深呼吸をすると。

ガブリッ。

唐突に己の手の平を噛み、ぎちぎちと音を鳴らして手から血を滴らせる。

「……ぐ、ううヴウ」

喉を低く鳴らして瞼を睨り眉間に皺を寄せた。

「……ば、う、が、せん……」

突然の事に一瞬意識が晴れて声を発したが呂律が上手く回らない。

グルウウウヴヴヴ。

低く何度か呻いてバルガ先輩は空いている片手で自身の下半身に手を伸ばすと無造作に自分の履き物の防具類を解き落として片手を内側に突っ込む。

ボロン。

目を開いてその光景を眺めていればバルガ先輩のイチモツが取り出されて大きく握る手で荒く上下に擦られ。がしがし、がしがしと、お風呂場の盥を磨く様な音がして、なんだか痛そうだと感じた。実際、バルガ先輩の片手から赤い

血が滴っている事態が痛いだろうと思う。

「……い、せい……の……っ」

手から牙を抜いたバルガ先輩が眩しそうな細い目をして私を見下げ眩く。

「……この、ぷ……プラントの、症状は……異性の、相手の、液体を……体内に、とり、こんで……一時的に、治まるんだ……」

私を見下げた彼の瞳は少し泣きそうだ。

「……ニアちゃん、くち、あけてっ」

ドロリッ。

開けた口の中に白い液体が上から溢れ落ちてきて私は指示されるまま、それを飲み込んだ。

バルガ先輩の処置で飲まされた白い液体を咀嚼しながら彼をじつと眺める。焼きたてパンみたいな黄金色の毛。頭の天辺から縦に流れる間の灰色の毛。人と、どこことなく違う太い筋肉の流れ。反応を示す灰色の尻尾や美味しそうな色の耳。獣特有の実家の犬を思い出す大きな口に牙。長い舌から垂れる涎を見ていると、ご飯をあげたくなってくる。ぶるりつと一度震えてから彼は出す瞬間に閉じた瞼を開けて私を見下げた。目が合う。

「……ごめんね、ニアちゃん」

気まずそうに言うバルガ先輩。

「……いいえ、的確な処置をしていただき……あ……言葉が」

本当に飲み込むと呂律が回るようになった。本には、そんな異性の液体など書かれていなかったと思われる。これぞ経験のなせる技なのかつと思った。

「……本当は……僕の自制が効く内に逃げてほしいけど、ここで、それはできないので……」

取り出したらしい水筒を、おもむろに頭からかぶったバルガ先輩は大きく深呼吸をしている。

「ああ……においがあ」

しかし深呼吸をすると彼は意識が辛くなるらしい。申し訳ない気持ちになりながら、あつと自分の汚物の事を思い出した。

「バルガ先輩！ 手、手を洗ってください……！ そのままだと破傷風になる

可能性が……!!」

「え……」

不思議そうな表情になるバルガ先輩。

「傷、手から血が出てるのに他人のゲロなんて……不味いんですよ!」

「ん……?」

バルガ先輩が待てをしている時に実家の犬がするみたいに頭を横に傾げて、ちよつと可愛いなんて思う。

「……」

「先輩、さあ! お互い意識がある内に!」

「……うん」

バルガ先輩が、ちらちら私を見ながら水で手を洗い。彼の、くりつとした灰色の瞳を私は見返す。

「……」

「……あ！ もしよろしければ、なんですが……刃物でこちらの腕の触手も切っていただけないでしょうか！」

「あ……うん」

私の身体上に跨り直しバルガ先輩が絡まって解けなさそうな触手を刃物で切ろうと私の腕に触れて、びくりっと身体が反応した。

「……んっ♡」

「……」

思わず出た声を唾を飲み込んで抑える。

「……」

バルガ先輩が触手の表面に切り込みを薄く入れると内側の液体が、じわりつと滲み出て刺激のある甘い匂いを広め出す。彼の鼻先が、くんつと揺れた。

「……ここでは切らないで、僕が、このままニアちゃんを抱えて外に出てからにした方が」

「だ、だめっ!」

「……どうして?」

慌てて否定すれば、灰色の瞳がこちらを見下げ中の色が心なしか揺らめいている。

「……そ、その」

「うん」

彼から顔を背け、じわじわと何かに染まりつつある頭の中で言葉を選ぶ。

「しよ、少々……刺激を感じやすい状態です……」

「うん」

「……あまり触るのを控えていただきたく」

「……でも、切ったとしてもまともに動けないんじゃないかな」

バルガ先輩が的確な事を言ってきて目が泳ぐ。

「とは言って……僕も、君の香りを嗅いでいると頭が刺激的な事になっていく

んだけどね……」

目の前で布板に彼の手の平が、ゆっくり置かれる。

「あ……」

「正直さ、もう……」

バルガ先輩の身が近づくと心配がした。温かい息が首元を撫でる。

「……う」

「……ニアちゃん、一つ提案なんだけれど」

「は、はい」

「……もし良ければ春の女神の踊り、僕と一緒にしませんか」

「……?」

さっきの話の途中になっていた女神が踊るらしい、お祭りを誘われて疑問符が浮かぶ。それは今、誘う話なのだろうか。否、バルガ先輩が今に繋がらない事をあえて言うだろうか。

「……その、はい。えつと……私でよろしければ……？　ですが、女神の踊りとは一体、なんなんですか」

好意をもっている相手とお祭りに出れる事は別段、悪いことでも何ででもないので承諾し、背けていた顔を向け、おそろおそろ訊ねてみる。

「ふふ」

見れば、バルガ先輩は大きな口の端を上へ上げ、とても嬉しそうに喉を鳴らし緩んだ目元をして私を見ている。

「ニーアちゃん」

「はい」

だらしなく緩んだ顔から出る舌で、べろりつと頬を舐められて、ぞくぞくとした感覚が身に広がる。

「あひや……」

「僕は君の匂いも可愛い仕草も面白い所も先輩だからって信用して簡単に頷い

てしまう所も好きだよ」

「へ…?」

唐突に好意的な言葉を言われて戸惑いつつも頬が朱くなってしまう。

「でも、とてもじゃないけれど他の雄にも同じ事をしてしまったら噛み殺してしまうかも」

「え?」

「だから…」

バルガ先輩の手の平が私の頬に触れる。

「君を安心して大好きって思えるように匂いを付けさせてね」

くちくち。

舌が私の耳の中に入って音を鳴らす。

「あ、う……ん……」

彼の荒い鼻息や温かい息を感じながら私は私で抑えることが出来なくなった
声を漏らす。

「かわいい……ほんと、可愛い……」

彼が舌を抜いて耳元で、ぼそぼそ、そんな言葉を言われると思わず背筋が反
る快感で困ってしまう。ふーっと息を吐き一度身を起こした彼は、ごそごそと
自身の上着を脱ぎ捨てて一度しまった、イチモツを下履き物から取り出す。

どうやら下履きに圧迫されていて苦しかったらしい。上向いたそれを、そのままに別の行動を始め私に語りかける。

「……緊急事態用の魔道具で簡易の盾を入り口に張ったから、ここの強さなら数時間ぐらいいは魔物は来ないから安心してね」

バルガ先輩は自身では保護魔法は使えないと言っていたが魔道具を通せば大丈夫なようだ。

「……あと……護兵は……五階の奥まった部屋だから、あまり来ないと思うよ」
あまりとは確率的に少ないという事で、それよりも、この流れはもしかして、もしかしてなのだろうか。

「バ、バルガ先輩……あの……っ」

「ん？」

優しい声で言葉を返しながら私の触手が絡んでいない脱げる範囲の服を脱がしたり捲っていくバルガ先輩。プラントの液体は乾きにくいようでネトネト

したままだ。肌が露出した部分に液体が、ぼたりと垂れる。

「その……ん……勘違いなら、とても、お恥ずかしいのですが……あう」

「うん、どうぞ」

嬉しそうに先を促すバルガ先輩。

「はっ……う……つと、た、例えばの話、この服を脱がす行為は……あ、んあ……な、流れからして緊急の処置というよりは……ま、交わりをしよう……ひゃんっ」

下半身の履き物を全部取られた拍子の布の擦れる摩擦感に快感が走り身体がしなる。

「はあ……すごい……」

下半身の熱っぽさを涼しくする空気を感じながら、バルガ先輩の感嘆じみた眩きが聞こえ目を向ける。私から脱げた履き物類を両手に抱え内側に顔をつっ込んで息を大きく吸うバルガ先輩がいた。

「……そ、それ」

よくよく考えると私は下からも液体を漏らしていたのだ。さーっと血が引くのを感じる。

「に、におっちゃ、だめ……」

慌ててそう言うが、ひよこりと出てきたバルガ先輩の顔は、ただただ嬉しそうだ。

「ニーアちゃんの匂いが、すごいよ……!」

明るく言った側から尻尾が後ろで、ぱたぱた左右に揺れている。

「わー! そ、そんな臭いの捨ててください……!」

「ふふ」

なんでか笑って目を窄めて私を眺めるその瞳が居たたまれない。嗅がれるのが悲しいやら恥ずかしいやら腕は未だ触手の絡まったままなので動かせる足でバルガ先輩の腕元の服を挟んで膝で引っ張る。

「だっ、めー……!」

「あふっ」

「え! あっ」

服を引っ張つると何故か抵抗しないでバルガ先輩もついてきて私の腰元に彼の上半身が落ちてきた。

「積極的だね」

「ひう」

私の履き物の下から顔を出したバルガ先輩は、べろんと私のへそを舐めて、にこにこしている。

「ニーアちゃん、さっきの質問なんだけど、もちろん当たり前だよ」

「え……?」

さっきの質問とは何だったか少し考えて思い出す。『交わり』だ。

「あ、たり……っ」

耳に私の履き物類が引つかかったまま、バルガ先輩は、へその穴を舌先で、ぐりぐりと弄くってくる。その行動に身体が反応して身が内側に丸くなろうとする。

「ひゃ、あ、あ……うつ」

彼の片手は私のわき腹を掴むように横からさすり。私は、その感覚に擦ったさと、ぞくぞくしたものを感じ身体が今度は上半身を捻って横に逃げようとする。

「ひっ、う、う」

横になった身体で彼の手の平を布板と身体の間で挟むが、その抵抗がなくなり手は移動していく。すると上まで上った手の平は私の脱ぎきれていない服のわだかまりが出来た部分に触れた。

ヌチュリ。

ずっと上げっぱなしで触手に巻かれている両腕の下に溜まる液体。脇に手を入れて汗とヌメヌメ、ネトネトした触手の液体を拾い露出している上半身の部分に液体を伸ばしていく。彼の手の平は脇から鎖骨周辺を伝い、首筋から喉仏を手の平を回すように動き、胸の間を通り、お腹に手を広げて回すように液体をネトリと広げる。広げた先で乳房下に指先が当たり下着も取られているそこは下から押され、くにつと形を変えた。

「は……っ、雌って……なんで、こんなに柔らかいんだろ……」

手の平で下から私の乳房を包み込みパン生地丸みを整えるように全体を持つて優しく回してくる。バルガ先輩は感触を楽しんでいるのか重力によって乗る乳房を、ただ手の平に乗せたり、すつと先だけを触れるように落としたり。

「あ、あ、んっ」

時折、乳首を掠める彼の手に反応して声が漏れる。

「はあ……可愛い……」

バルガ先輩が、そう呟きながら身を傾げ私の顔を覗き込んだ時、耳に引つかかっていた私の履き物類が目の前に落ちてきた。

「あ」

バルガ先輩は、それを見て私の乳房から手を外し落ちた私の下履きの中に片手をつ突っ込む。ゴソゴソと音を立てて引っ張り出されたのは先ほど下履きと一緒に脱がされた下着。上の脱がされた胸当てと同じ色の薄い水色のそれを緩く持ち上げて私の目の前にかざした。

「水に浸してみたいだ」

笑顔の彼が、そう嬉しそうに言って私の顔がカッと朱くなる。

「でも、ここは……もっと」

にゅちゅ。

「んあっ……」

彼のアレが私の敏感な中心部に当たり縦の割れ目を滑った。

「ドロドロ……」

そんな笑顔を近づけたバルガ先輩は、ぺろっと私の唇を舐める。

「へあ」

驚いて少し固まるが、おかまいなしにバルガ先輩の、ざらりとした舌が私の唇の端から端まで移動し、するりつと割って舌が入り込む。

——……種……

触手の種の事を思い出し舌でバルガ先輩の舌を外に押すが簡単に流され反対にうごめく舌同士が密着して絡む。絡んで身体の中に高揚感が生まれた。

くち、にち。

液体と肉が触れ合う音がして私は唾液を飲み込む。異性の液体とは、唾液も含まれるようだ。気持ちよさに興奮もあるが彼の唾液を飲むと、繰り返し上ってくる意識の朦朧がせき止められる感じがした。

うごめく彼の舌が私の頬裏を押し上げ、突つき、なぞり、張り付いていた違和感を一つ一つ、取っていく。器用な事に、とったそれを確実に目が出ないようにか己の歯で擦り潰しているようだ。

しかし、液体で、こんな事になる種をあえて擦り潰して飲み込んでも大丈夫なのだろうか。身に沁み込んだプラントの液体の影響だろう。時折、どこか溺れるような感覚の溝に行きそうになるが彼の唾液で思考ができる。ならば私の唾液でバルガ先輩も意識が直りやすくなるだろうか。

ちゆる、くちゅ。

そう思うと種を取ってくれたバルガ先輩の舌に、積極的に絡んでしまう。

——……きもちい……

舌が擦り合うって、気持ち良い。
身体が、とろとろになる。

——……はまってしまいそう……

どれぐらいかは正確な事は、わからないが一時ほど舌を絡めあえば完全に種

は取れ、ねちよりつと音を立てて私達の舌は抜け出した。唾液の糸が大きく糸を引いているのが肉眼でも見え。私は、なんだか今更な事に恥ずかしくなった。

身体をより近づけた今を認識して私は、この体勢に気がついた。曲げた私の両膝、浮き上がった腰は彼の折り畳んだ膝上で、その彼の両膝が私の膝裏を押し上げている。

「あ……だ、めっ、うぐ、いちや……んっ」

そんな彼の腰は、ゆるりゆるりと動き彼の立派なモノが私の割れ目の間の上を歩き来して敏感な部分が刺激されていく。

ぐにつ、コリツ。

ぐにつとバルガ先輩のイチモツが私の小さな丘を潰して進み、反対に彼の先、キノコの頭のような場所で今度は、コリツと引っかけて引き戻っていく。

「ひっ、うあ、あ……あっ」

私の乳房を両手で今度は先程みたいに表面だけでなく個々の手の平に包んで揉んで乳首を時折、指の間に挟んでは刺激してきて感じてしまう。

「あ……はあんっ」

バルガ先輩の繰り返し返す腰の揺すりと指の平でコロコロ転がされたり潰されたりする乳首との刺激が重なって身体が、びくりっ、びくりっ跳ねる。

「あ、あ、あ……っ」

思わず太股に力が入り左右からバルガ先輩の腰を挟み込む。

「あ……ひいんっ」

しかし、私の腰は震えを止める事ができない。バルガ先輩が私の足の挟みなど、もろともせずに腰を動かし続けるからだ。

「や、あ、あっ」

「は……っ」

バルガ先輩は私を嬉しそうに見下げながら荒い息を吐き。両手は入念に私の乳房を揉み。もつと強めに乳首を遊ぶ。

「……だう、あ、い、ふっ、あっ、あっ」

きゅつと乳首が彼の指平の間で捻られ腰が、また震え胸が仰け反った。

「あ……は……っ♡」

私の股の間。敏感な陰核から、ぴゅるっとか何か出る感じがし。それが出る度に鋭かった気持ちよさが、柔らかい気持ちよさを広げてくる。顎も仰け反り小部屋の薄暗い天井に視線が朧気に向かいながら口端から涎がツウ……っつと溢

れた。

「あー……良い匂い……ふはっ、ははっ」

私が氣をやっている中、バルガ先輩は私の両足を腕の中に閉じこめると、ぎゅうつと抱きしめて、その太股の間に挟まるイチモツを激しく動かす。ぎゅつ、ぎゅつと擦り上げバルガ先輩も腰をガクガクと震わした。

「ぐう、ウ、ヴヴヴヴ……」

喉を鳴らして腰を止める。バルガ先輩の肺に空氣が出入りする度に肩の肉が膨れ下がり。ぼんやりとバルガ先輩の、そんな様子に目を向ければ、私の太股の間では止めきれなかった白濁が、どろりつと溢れ出た。

「……ん」

バルガ先輩が、ゆつくりと私の足を腕の中から解放したかと思うと上向いて液体を溢す彼のイチモツが視界に入る。立派なそれは、びくびくと頭を揺らして白濁を垂らして、バルガ先輩は、その先っぽを、おもむろに何かで包み込ん

だ。

——……ぱんっ……

放置されていた私の下着で、バルガ先輩は白濁を垂らすイチモツを拭いて、むしろ少し上下で擦って内から未だ少量出てくる液体を染み込ませる。

「……えあ」

驚いて少し声を溢すとバルガ先輩の灰色の瞳と目が合う。彼の瞳は先で燃える薪に反射してか、ゆらゆら揺らめいている。彼は目を細めると優しい声を落としてきた。

「口開けて、ニーアちゃん」

どういう事だろうと見つめながら一応、口を開けると、そのドロドロの下着が小さく丸められて私の唾内に入れられた。

「!？」

わけがわからず吐き出そうとするが、そっと口上に手の平が、かぶせられる。

「……………！」

「思ったんだ」

「……………？」

バルガ先輩は私の片足を脚裏から持ち上げると膝上に唇を、ゆっくりと当てた。

「それを染み込ませて口の中に入れてれば、ニーアちゃん、僕の事わかるよね」

「……………」

これは体液を少しずつ摂取する為の対策という事なのか。瞼を何度か瞬かせ吐き出すのを止める。止めると手の平が、ゆっくりと退いた。

「……素直だなあ」

肩を揺らして嬉しそうに喉を鳴らすバルガ先輩。

グルルつとした音を聴きながら彼を、じつと見つめる。

「……今つてき、すぐにでも君を、どうにかできる状況でさ。僕も言い訳きくんだけど……」

私の片足を、ぐつと押して足の甲に唇をつけた彼は皮膚を吸い込む。チリツとした痛みと柔らかな快感。でも先程ほどじゃない。

「……ふはっ」

バルガ先輩は私の足先の指を咥えると、ちゅつ、ちゅつと柔らかく吸う。

にち、にちゅ。

私の足指を吸いながら片手で自身のアレを、ゆっくりと擦り。薄目で私と目

を合わせてくる。私は口の中の独特な味を感じながらバルガ先輩を、ただただ眺め。肉が擦れられる音を聴く。ふーふーと熱い息を足の甲にかけ瞼を瞑った彼は、喉をグルグルつと鳴らし、びゆるりつと私の股の間に新しい白濁を落とした。

「……」

温かい、それを感じながら少し首を傾げる。瞼を開けた、バルガ先輩は私の足指を口から引き抜き足の裏を、ざらりとした舌で一舐めした。

「……やっぱり君の匂いを染めれると安心するね」

「……んっ、うっ」

喉奥から、くぐもった声が漏れる。白濁で汚れた片手を使いバルガ先輩が指で私の割れ目の間を、ゆるりとなぞって動かすから。

「……その触手切るのは外に出た後で」

くちゅっ。

「……んっ……んっ」

一本指が左右に捻りながら、ゆっくりと私の膣内に入り込む。

「限度が無くなると盾の時間、絶対越すし」

膣内に入った指が中を行ったり来たり。前後に動いては敏感な部分を刺激して。

「う、うつ、む、んっ」

「……あー……舐めたい……ここ、舐めたい……」

グルル、グルル。

喉を鳴らしながら彼は刺激を止める事なく続け。

「……君を巢に、お連れしたら、もうっ絶対……」

「……うっ、んんっ……! んっ!」

私は逃げれない上つてきた感覚に顎を仰け反らせ、閉じていた口を開けて独特な風味を混ぜた涎を溢し喉をひきつらせた。

傲慢獅子に疲れたノノ先生はスライムマッサージで癒される



【登場人物】

主人公…ノノ♀

薄茶色の髪、薄茶色の瞳、巨乳、安産型のお尻、学舎（学校のような所）の教育者、叔母にサキュバスがおり血が一部流れている。

可愛いよりの顔付き。

一人称、私。

お相手1…獅子誉（ししまれ）♂

明るい橙色の髪、銀色の瞳、獅子の獣人、もふ三角耳、尻尾は千切れて無い、背の高い筋肉質、優等生風をした悪ガキ、ノノに惚れている、ノノの教え子。作ってないと強面のイケメン。

一人称は作っている時は僕で素でオレに変化。

お相手2…スラ（スライムは性別無しだが男性体を好んで取っている）

基本擬態の人型男性を装う、水色の髪、水色の瞳、引退した元スライムの王、大きな高級宿の主、己の身の触手を使った特別なマッサージが得意♡元カノの可愛い姪っ子色々と可愛がってくれる、推定千歳過ぎ。

デフォルト疑似は優しげな、ほんわかイケメン。

一人称は営業中は私で素で僕に変化。

モブー…ねーさん（スラの元カノで、ノノの叔母にあたるサキユバス）茸占いという、ちよつと卑猥な店を経営している。

グラマーな美人の、ねーちゃん。

一人称、アタシ。

モブ…その他

*

この世界には獣人や魔人、人外など人族とは違う生命が多々、存在し、そんな彼らが平等に通う名門学舎が存在する。小学舎から高学舎まで連動式の名門

学舎。その中学舎から高学舎の術式倫理を教える教育をしている先生の一人がノノである。ノノは自分専用の教育室で次の課題作りをしていた。巨大な学舎で現在、術式倫理の教育者となるのはノノのみである。

術式倫理とは術式を使うにあたって、どういった弊害が存在するか種族によっての価値観の違いなどの話などを教える授業となっている。術式を使わない一般人との事件などから数年前から授業の一つとして組まれる事となった。前は、もう一人同じ教育者なる者が存在していたが高名な方だったので忙しく一年前に退職してしまった。今は論文等の本を出し中々の売れ行きを見せている。

「うう……肩と腰が痛い……」

今年で二年目のノノは学生からは舐められ気味で授業も実技とは違い価値観の認識を改めるだけなので人気が無い。しかし教えるのが仕事だ。だが中学舎から高学舎まで担当するのは、ノノ一人なので最近は大量の課題作りで机にへばりつき身体の痛みを感じていた。

コンコン。

扉のノック音に、ノノは背筋を伸ばし振り返る。

「はい？ どなた」

「失礼します」

扉を開けて室内に入ってくる五人程の男子生徒。垢ぬけた風貌の五人は室内に、ぞろぞろと入り込み最後の一人が扉を閉める。

「ごめんなさいね。学年、組と名前を、お願いして良い？」

「……はい。代表して僕が。高学舎三年特級組の獅子誉（ししほまれ）です」
獅子誉と名乗った彼は明るい橙色の髪の間から獣人の耳を生やしていて、ピツと上に立っており、ノノは少し可愛く感じたが表情には出さず言葉を返す。

「全員、同じ組ね。それで、ご用は何かしら」

「うん。僕ら先生に渡したいモノがありました」

背が高く筋肉質な身体の誉が、ノノに近づく。優等生風なニコニコ顔の誉を見上げて、ノノは距離感が少し近い彼から両手で支えるぐらいの袋を渡された。持つとしつとりした感覚と不思議な香りが鼻腔を擦った。

「……僕、獅子の血筋なんです」

「そうなのね」

「尻尾は昔、試練中に千切れてしまつて無いんですが若干なごりは、あるんですよ。見たいですか」

「ふうん？ 観賞は遠慮しておくわ」

横向きになつて自身の尻の上側を叩く誉をチラリと一瞥して、ノノは袋に目を落とした。

「それで、これは……」

「開けてみてください」

促されて、ノノは袋を膝上に置き紐の縛りを解いていく。袋を開けると少し甘い良い家に呼ばれた時の香りに混ざって、どこか生臭い臭いがした。

「布……？」

「よく嗅いでみて」

「……？」

ノノは細々と幾つも入ってる布の一枚を手に取り広げる。何か染み込んだ痕と、その部分のカピカピした触り心地。布の質材が滑らかな分、妙な質感だった。ノノは多分、この部分から生臭い臭いがするのだと鼻を近づける。

「獅子は回数が多いのを、ご存知ですか」

「回数……？」

「なので、その袋の半分は僕のです。色も丁度ノノちゃんが持っている白布が僕の」

「え……？」

ノノちゃんと、突然仲良さげな名前で呼ばれて戸惑いつつ袋の中を、よく見てみる。中には水色や桃色、黄色、緑色と白と合わせて五種類の色がある。確かに細々とした布は白色が一番多い。

「君の……」

「それも早朝出した、ばっかり」

「早朝……え、ん？ 出したって……」

ノノは手を震わせながら布を袋に戻し口部分の紐を、ぎゅつと閉める。

「……もしかして、そういう事なの？」

「そういう事とは」

ノノが顔を上げれば嬉しそうな顔をした誉と目が合う。橙色の髪をかき上げて銀色の瞳を細める誉。耳が、ぴこぴこ揺れている。

「……貴方達は悪戯をしに来た。そう認識してるわ」

「ふは！ 悪戯！ うーん。僕らが酷くつまらない術式倫理を専攻する理由つ

て、ノノちゃんは、ご存知で？」

「……倫理を学ぶ以外に何があるというの」

「ありますよ」

誉の身が一步、ノノに近づき脚が椅子に座るノノの膝から太股に滑り触れお尻横に彼の開いた片脚が、ぴったりと張り付く。

「ノノを視姦する為に決まってる」

「……」

はあつと、ノノは溜息を吐いた。若い教育者は舐められやすい。特に有力な親を持つ分別を持たない生徒に。

「震えちゃって可愛い」

怒りを我慢しようと震えているノノの頭を撫でる誉。ノノの肩まで伸びている薄茶色の髪が揺れた。

「でも、サキユバスにとっては、この香りが好きなんですよ？ ああ、だった

ら歓喜でも、してるのかな」

「……は？」

誉が笑い出し後ろで控える他、四名も笑いだす。

「茸占い屋の身内がいるだろ」

「……なっ」

後ろに控えていた一名が電子機器の画面を、ノノに向け映像を見せてくる。

「ここのサキュバス話す機会があつてさ」

「……ああ占いを受けたのね」

流れる映像は店の外観から内観、されている時の実況まで。この中の誰の射
精映像かは知らないが。

「……で？」

「うん？」

顔を上げているノノが、じっと誉を見つめる。誉は嬉しそうな表情をしたま

ま首を傾げた。

「だから貴方達は、それを私に教えて、こんな悪戯をして何が言いたいの。驚いて羞恥に染まって涙を流してほしかった？ それとも興奮したサキュバスに搾り取ってほしかった？」

「……」

誉が真顔になった。

「はあ。呆れる。これは学長に報告させてもらいますから」

「……いやいや。サキュバスってバレたら嫌だろ」

「現、人類の八割は、何かしらの種族の血筋を遺伝子上、引き継いでいます。私の親戚が、たまたま売れる占いで目立つだけで君達もサキュバス又はインキュバスの血が流れている可能性は多いにあります。それは最初の授業で必ず教える内容ですが。覚えてないんです？ 必須ですよ」

「……」

「まったく……こんな証拠になるモノまで私に渡して想像力が足りないのかしら」

「っ……………！」

「まあ……一応は未来ある子達ですからね。軽いモノで済ませてあげましょう。学長と相談した後、課題と罰を与えますので。さあ、もうすぐ予鈴が鳴りますよ。出て行きなさい」

「な、何を言ってるんだ！ だったら今、ノノを」

「わきまえない！」

ノノは袋を机に置きながら立ち上がると、ほぼ密着したままの誉に向き合った。

「生物上の身体の反応自体は仕方のない事です。が今、貴方達がいるゲスな行為は本来なら術式剥奪になるやもしれない犯罪行為衝動です。しかし、ここは学舎。その危ない衝動を倫理として教えるのが私の役目であり術式倫理です」

「術式は使っていないし……」

「いいえ。術式が使える者が犯罪を犯せば世間は使っていないくとも使い犯したと判断します。特に貴方達のような優秀な生徒は格好の餌食となるでしょうね。そして能力は封印され進める筈だった栄光ある未来は失われる事になるでしょう」

「……」

「けれど守りがある内の学舎での失敗を経験とし悔い改めるならば貴方達には未来があります。さあ予鈴が鳴っています。授業へ行きなさい」

「……」

「行くわ……」

「俺も」

「失礼します……」

「すみませんでした先生」

誉以外は扉を開けて出て行き残った誉は未だ、ノノと密着して対面したままである。

「誉」

「……ノノ」

「先生を付けなさい」

「ノノは見た目が好みだけじゃなく、その気の強さがオレ好み」

「僕はどこいったの」

「こっちが素。格式もって話すのって苦手」

「……授業へ行きなさい」

「わかるだろ？ オレの下半身、興奮して授業どころじゃねーよ。ノノが胸を押し付けるから……」

「貴方への罰は二倍にします」

「愛が増えるのか」

「……その樂觀思考を鍛え直さないといけませんね」

「特別授業してくれんの？」

「……はあ」

ノノは内心、焦っていた。間近のまま勢いよく立ち上がれば近付きすぎた音が下がると思っていたのに下がらず。叱咤すれば引くかと思えば動かず。体格の良い彼は、ビクともせず目の前に立っている。授業に行けと何度も言っているのは早く解放されたい為だ。

しかし立ち上がって虚勢を張った今、椅子に座り直したり身を避けようとした時点で傲慢な態度を見せる誉に対しての威厳は薄まり均一が取れる可能性がある。

だが、この状況は不味い。目の前の生徒は強く勃起した前側をノノに、ぐりと当てているし。反対にノノは大きな乳房を不本意ながら誉に押し当てている。

「……ここ。本館からは離れて人気は薄いけど誰も通らないワケじゃねーよな。実際、オレらは来たワケだし」

下ろしていた両腕を上げてノノの背中を撫でながら背後の全開扉を意識するよう顎で促してくる。

「生徒と卑猥な密談をするノノ先生ってか」

「……どうかしてるわ」

「ノノ」

「先生を付けなさい」

「オレの可愛い雌猫になってよ」

「貴方って……アホなのね？」

「酷い言いよう。興奮する」

「どういう事なの……」

「ノノ。世の中に倫理が生まれたなら、それに反するモノが在るはずだろ？」

「……」

「ねえ。オレに特別授業で教えてよ」

「……氷結の精霊よ我に力を貸したまえ。氷粒を誉の背中へ！」

「うわっ!! ちょ、つめったっ！」

服の内。背中側に氷が入り込み慌てた誉が上着を脱ぐ為に、ノノから離れる。

「術式、学舎で使うの禁止じゃねーのかよ！」

「時と場合によつては許可されているわ。それが今」

ガラガラと服から溢れ落ちていく氷。誉の足下で、それは氷水となった。

「……ひでー」

「……雑巾とバケツを用意して、それを片付けなさい」

「ええ〜？」

ノノは脱いだら細身の見た目とは違う鍛え抜かれた美しい筋肉に沢山刻まれている痣を一瞥し部屋内に設置してある給水場に向かう。

「……それが終われば個人面談をしてあげる」

お茶と茶菓子の用意をしながら、そうノノが言えば誉は嬉しそうに返事をした。

「オレ頑張っちゃう」

「……苦手な味はある？」

「柑橘類と珈琲と甘すぎるのも苦手」

「……黒豆茶を入れるわ」

「それなら飲める」

注文の多い誉に苦笑しながら茶菓子に出そうとしていた柑橘が混ざった焼き菓子を止めて煎餅を取り出す。

「手は洗った？」

「洗った。偉い？」

「偉いわ」

「じゃあキスして」

「……どうして、そうなるのよ」

「ノノに惚れてるから、ご褒美は決まってるでしょ」

「……脅して回そうとしていた癖に」

「うん。ごめんな。見た目が最高に好みなだけかと思ってたから気持ちとか、
どうでも良くてさ」

「……誉にとつては見た目が好ましいだけなら共有するのも構わないの？」

「うーん。汚れてる、ノノちゃん見たら興奮するなって思っ」

「ノノでもノノちゃんでもなく先生を付けて呼びなさい」

「良いじゃん。二人っきりの時は、ノノで」

「それを決めるのは誉では無いわ」

「ちゃーんと人目ある時は、ノノ先生って呼んであげるよ。ノノちゃん♡」

「……貴方の性的趣向は、ともかく。そういった事柄は、お互いの同意があつ

てするものだし強姦行為は法で確実に裁かれるわ。二度としないようにね」

「ノノがオレの雌猫になるなら、いーよ」

「……そもそも私は年下は好みでは、ありません」

「ふーん。まあ好みは年月と共に変わるもんでしょ」

「それを言うなら貴方の好みも変わるといふ事です」

「でも初恋は基盤だから、このままじゃねーかな」

にと笑う誉の口元の歯から牙が覗く。

「つーか。この煎餅美味しいね。何処の？」

「……これは三駅先の駅前に売っている餅屋の煎餅なの」

「へーえ。餅屋の煎餅かオレも取り寄せてみるか」

「あそこは通販をやっていないし直接買いに行った方が良いわ。ついでに飲食も出来るから焼き餅も食べるのを勧めしとくわね」

「何味があるの？ ノノは何味食べる感じ？」

「醤油、味噌……胡麻や大葉もあるけど私が頼むのは辛子魚卵の、お餅かしら」

「じゃあ、放課後それ食べに行かね？ デートしよ」

「しないけど行くなら騒がないようにね」

「ノノちゃんとデートじゃないと、オレ鳴いちやうかも」

「がおーって？」

「やだ可愛い。好き、えっちしよ」

「しないけど合意を取ろうとするのは一步前進ね」

「うん。毎日、ノノを犯して手を汚してるんだけど今夜も汚して良い？」

「自慰自体は好きにしないさい。ただ教える必要性は無いわ」

「やだなあ。意識させたいから教えるんじゃない」

「嫌悪の意識で良いの貴方は……」

呆れ顔で、ノノが誉を見れば、につこりと微笑む。

「ノノなら大丈夫な気がする」

「……大丈夫じゃないわよ」

「……それって、えっちな意味で？」

銀色の瞳が窄まって、ノノを舐めるように見つめる。

「ノノは獣人が鼻良いつて知らないわけ」

「……サキュバスの血が流れようと精が食事では無いように」

「ふはっ！ あはははっ！ オレの嗅いだ時から濡らしてるのに！」

「……」

「自然現象だよなあ。サキュバスの」

「……そうね」

「良い匂い。見た目も匂いも性格も好きだよ」

「……そう。ありがとう」

「あ、もしかして魅了で勝手に惚れてるのか思ってる？」

「えっ」

「それも食事を得る為の、サキユバスの自然現象だよな」

「……ええ。私のは、ちよつと好意的になる程度だけどね」

「オレ、耐性あるから平気」

「……そうなの」

「その上で好きなワケだ」

「……」

「ノノ先生大好きな推し推しの優等生やってあげようか」

「遠慮しとく」

「オレに好かれたらお得なのに」

ノノは深い溜息を黒豆茶で流し込んだ。

問

*

「いらっしやいませ」

「あ……今日からお世話になります」

叔母に招待されてやってきたのは巨大な高級宿屋だった。その主となるのがスライム王のスラという見た目、優男な青年らしい。柔らかな水色の髪がフワフワと揺れ、優し気な水色の瞳が、ノノを見つめる。

「先ずは温泉でも如何でしょうか？ その間に、お部屋にお料理をご用意しておきます」

「あ、ありがとうございます」

「着替えも彼女から一式、預かっておりますので気にせずに」

「ねーさん、あ、祖母が……」

「可愛い姪っ子のノノさまを愛情もって、ご案内します」

促されるまま専用の貸し切り露天風呂に浸かり、冷たい柑橘類のジュースを頂きながらサウナにも入り、スツキリした所で脱衣所に行けば笑顔の制服姿のスラがいた。

「え！ わわ……」

「さあ、ここに横になって下さい。保湿いたしますので」

「え……？ は、はい……」

ノノは全裸を見られた事に戸惑いながらも見た目は青年でもスライムは元々、性別の概念が無い事を思い出し素直に簡易の寝台の上に俯せで横になった。

「先ずは、お顔からしたいので背中、失礼しますね」

「はい？ わっ」

背中にかか水気のある柔らかい弾力が乗り顔を横にして見ると制服姿のスラがノノに跨っていた。ノノは服の質感が無い事に驚く。

「……もしかして、その服って擬態ですか？」

「はい。スライムの能力です」

「凄い……」

「ふふふ。ありがとうございます」

スラの手がノノの顔に伸び、頬や鼻筋、額、耳裏を撫でていく。

「……ん」

「眠っても大丈夫ですよ。お部屋まで、お運びしますのです」

「……そんな、もうしわけ、ない……」

日頃の疲れからか眠気が、ゆらり、ゆらりと訪れるノノ。

「可愛い可愛いノノさまに極上を……」

眠りに入っていくノノの耳を撫で、ゆつくりと内側の輪郭を触りながら彼女の背中に身を寝そべって貼り付ける。擬態していた身は、トロトロと形を溶かし厚みがある水色の液体となつて上から、ノノを囲っていく。湯上がりで、ほ

んのり冷たいソレは、ノノに心地良さを与えた。

「前側も保湿しますね」

眠るノノは特に反応しなかったが、スラは自然な手つきで、まだ擬態していた手を彼女の顎下に滑らし簡易寝台と身の間に液体となつて入り込んでいく。その水色の液体はノノの身体全体を包み込むと、ぐにぐにと海面の揺れの如く動き出す。

「……ふうん……ふうん……♡」

寝息の中に甘い響きが混ざる。

「汗が美味しいです。でも水分補給してもらわないといけませんね」

時間経過で安眠効果のある飲物を口にしていたノノだったが、スラの全体を保湿し解す行為で、お風呂上がりに汗を滲ませていた。スラの水色の身の一部が顔の形に変わっていく。ノノの顔を横に向かせると吐息を漏らす唇に口元を合わせた。舌が入り込む。無意識に、ノノが口内に入り込んだ異物を自分の舌

で押したがヌルリと絡まるだけで出すことは叶わない。その内、ピュルツとした音と共にノノの口内に液体が滲む。吐き出そうとも密着した顔に隙間は無く喉が鳴る。

こく、こく、ごく。

「良い子、良い子」

何処からともなくスラの身体から言葉が発せられ水色の身の部分が、プルプルと揺れた。

「では内側に失礼しますね」

ノノの下半身側、ヘソの穴を弄っていれば彼女のお腹が、ゴロゴロと鳴る。それに合わせて尻の割れ目に張り付いていた身の部分が伸びて後ろの穴へと細く入り込む。するとノノの肌下に張り付いた身は、そのままに上に乗るスラの

身体は人に擬態し腰元となる部分でノノの尻上で身を上下に揺らした。

「ふふ……美味しいなあ……」

にち、にち、にち。

ノノの内側の大きさに、ピッタリと合わせた柔らかい身は何度も出たり入ったりを繰り返す。

「ふう……うう……んっ」

「水分が足りなくなったら次は、こつちから入れますね」

揺すられる度に汗を滲ませ寝息と共に軽い呻きが喉から漏れるノノ。

ぬち、にち、にちゅ。

「ふぁ……う、あうっ」

「前も美味しそうだけど駄目だつて言われてるから我慢しないと……」

そうスラは呟いて、ノノの前側の割れ目を水色の身で撫でて内側の朱い豆の膨らみを、ちゅっちゅつと身で吸い上げた。

「んぁ……♡」

「ほーら、出しちゃってくださいねー……ノノちゃん」

そうスラが囁けば、ノノの身が、ぶるりと震え腰がカクカクと小さく前後する。

そして。

ちよろ……ちよろろ……。

滲み出るみ水分に素早く身を張り付けて、スラは、それを吸い上げた。水色

の身の一部が、じわじわと薄い黄色に染まり少しして水色に戻る。

「はあ……美味しい」

スラが穏やかな表情で、ノノを撫でて彼女の小さな震えが完全に収まり静かな寝息になるまで待つ。ノノの寝顔を眺めて、スラは、のそりと簡易ベットに擬態した身を下ろしていく。その間にノノの身に張り付いていた水色の身が、ぷちぷちとスラから千切れ形を変えていく。

浴衣や上下の下着に。

「……」

スラは自分の分身が入ったままの、ノノのお尻を、するりと撫でて微笑んだのだった。

111 傲慢獅子に疲れたノノ先生はスライムマッサージで癒される♡

寂しがり屋の親友の睡眠姦

【登場人物】

主人公…ナシヤル♀

黄緑色の髪、草色の瞳。

男まさりな悪ガキ時代をトピアと共に過ごすのが成長するにあたって雰囲気や自分の身体に違和感を感じ困り歪んだ思春期を過ごす。

一人称、私。

お相手…トピア♂

短髪朱髪、銅色の瞳。

幼なじみ。世間的には優秀な騎士。内に秘めたるは変態屑の資質。

一人称、俺。私（外面）

モブ…蜂蜜屋のミミ

二人を見守る、お節介な友達。

一人称、アタシ

モブ…神父

トピアの祖父。町の慕われる神父。

モブ…護兵三人

若者二人と中年一人

モブ..伯父、両親
話題で出てくるのみ

*

灯るランプに照らされた浴槽。淡い橙色の光の中で薄暗く影を落とす部分とよく見える部分。

ちやぷん。

湯船が揺れて目の前に座る幼馴染が手を伸ばし私の黄緑色の髪に触れた。濡れた髪を指で梳きながら耳にかけて視線が合う。彼の銅色の瞳に私の顔が映つ

ている。瞳の中の少女は草色の瞳を彼に向けていた。

幼馴染のトピアの指が髪から離れ下に滑る私の頬に触れ、スツと肌を撫でた。流れ落ちていくトピアの指平は胸元を撫でて、その絶妙な触れ方が擦ったくて笑いながら身を振り。浴室に幼さ特有の高い笑い声が、きやらきやらと広がる。湯を弾いていた私の手の平が何処かへ触れて柔らかい感触がした。

「んっ」

私と、じゃれ合っていたトピアが、その手で私の手を掴む。

「ごめ」

腰元の何かを触って痛かったのかと思ひ咄嗟に謝れば湯で上気した頬に水滴を垂らしながら、トピアは顔を横に振った。トピアの手は私の手を何故か、その場からズラさず寧ろ押し付けてくる。柔らかかった感触は何やら固さを持ち始め。

「トピア……?」

ざぶり。

湯が大きく揺れた。

人の身が影になって見えにくかったそれは、トピアが私に近づいて視界に認識する。服を脱いだ時には見えなかった、ふにやりとした尿が出る筈の、モノが固く上むいていて。私は不思議に思っ、それを軽く撫でた。

「ふぁ……っ」

トピアが肩を揺らして声を漏らす。

「いたいの？」

「ううん。気持ちい」

「きもちいの……」

「……うんっ、ナシヤルの、おてて、きもち、い……っ」

「そうなの」

「うん……」

何故、アレの形が変わってしまったのか良く分からなかったけれど、その時の私は、トピアが求める限り触り続け。湯船に何やら濁った塊が浮かんだのを見た。どうも、お漏らしとは違うモノらしい。トピアの表情が満足げで、そう感じた。

「俺ら入るの最後だから……ちようど良いよね」

可愛らしい声で、トピアが、そう呟いて私の頬に唇を押し付ける。

「ありがとう、ナシヤル」

耳元で、トピアが可愛い声で、そう呟いて私は良い事をしたんだと思い笑顔で頷いた。

「おやすい、ごようだからー」

「ほんと？ 嬉しい」

それから、トピアとのお風呂は、そんな不思議な感覚が起こる日常となり私は時間が経つにつれて、ソレを止めた方が良さような気がして、しかし言う事も出来ず。結局、彼が騎士団に入団するまで、それは続いたのだった……—

隣の夫婦と私の両親は子供の頃から仲良しで、産まれた子供の私達も自然とその輪の中に収まった。四歳年上のトピアは、頼れるお兄さんかといったら全然そうではなく、一緒にイタズラばかりをする悪友だった。頭が良く体力のあるトピアは、毎日毎日、いらぬイタズラを考え。まあまあ、魔力をもつ私はそれに便乗して実行する。やる内容といえ、本当に下らないことばかり。

例えば禿な神父の素朴なカツラを彼に感付かれることなく色鮮やかに取り替

えるとか。

根暗で陰気臭いと街から煙たがれる魔法使いの家に蛍光の塗料を施し夜中眩しくさせるとか。

飲酒中毒で騒ぎばかりおこす男の酒瓶を一カ月間、執念深く蜂蜜に取り換えるとか。

王都から休暇に來た傲慢貴族男の独特過ぎるキツイ香水を全部、果実水にするとか。

そんな、ことばかりをしていた。

私が使える魔法といえは数十分そこら透明になれる（体調によって時間の差異がある）。

自分達の気配をかなり薄くできる（虫ぐらい）。

妄想力の感情を高める（相手も可、幻影とは違う）。

と、この三つのみで珍しいけど魔獣と戦う為の通常攻撃に必要な火・水・風・

土などといったものが一切ない。

一応この能力、光と雷の混同とはトピアが教えてくれたが、だったらそれ系の攻撃魔法、せめて夜道の電灯になつて欲しかった。

しかし、この魔法、身体能力がずば抜けて高いトピアにかけるとえらく有能な感じに発揮する。カツラ取り換えなんて、お茶の子さいさい。突風を身体能力のみで吹かし透明なまま俊敏な動作で風力で浮かび上がったカツラを色鮮やかな物と取り替える。

その時間差、ほんの一秒たらず。

私はその間、神父の妄想力（集中がそちらに向かう）を上げて、透明化したトピアの気配を虫並みする。終わると、後はカツラにざわつく教会から堂々と逃げていくのだ。

終わった後は、蜂蜜屋の蜂蜜氷菓子で乾杯。

そんな自他共に認めるクソガキな私達は、クソガキなりの純粋さで生きてい

た。

「輝く魔法使いの家！」

「まっぶしいー！」

蛍光の塗料を魔法使いの家に塗り付け美的感覚を上げた私達は大いに汚れていた。その日の決行は両親にバレないよう家を抜け出して行い。そのまま帰ってしまうとバレバレなので何処かで洗い流す必要性があった。

トピアは魔力の容量は私に劣るが良い感じに四属性は使う事ができる。近い森内の小川が流れる場所で土魔法と火魔法で簡易の桶を作り水を入れて温め。服を脱ぎ捨て二人で浸かる。トピアが優秀な如く用意していた石鹸を使いお互いの身体を泡吹かせた。

擦りの延長戦で笑い転げながら互いを綺麗にした、それで感覚が麻痺したのかもしれない。

あの日から定期的に一緒にお風呂に入る事が増えた。

遊びの延長戦で特に疑問も抱かず回数は増え。ほぼ毎日になった頃、トピアに騎士団入団試験のお誘いの手紙が来た。試しにと受けた試験は即、受かり、トピアは入団に、どこか少し渋っていたが結局は周りからの応援もあり入団する事を決める。

私は、その時、少しホッとしていた。

身体が成長するにあたって何か不可思議な感覚になり始めていたからだ。トピアの事は大好きだが一緒にお風呂に入る事が避けれず内心困っていた。だから嫌がっていると言わずに悩み事が無くなるのが嬉しかったのだ。

トピアが半日で行ける距離だが、それなりに離れている王都の騎士団寮へ行く前の最後の夜。何時も通り共に湯船に浸かった。

「……」

「……」

その頃の私は成長で膨らみだした自分の乳房が嫌だった。トピアの形と違う。

異質な感覚が、どうにも許せない。そんな風に自分の乳房に対して感じていた。

「ナシヤル」

「……なあに？」

今日は、しんみりとした気分なのか無言で目が合うだけだったトピアが呟いて言葉を返す。

「今夜は一緒に寝ても良い？」

湯に濡れた短髪の朱髪から雫が落ち、銅色の瞳が艶めいて揺れている。

「え、えっと」

「寂しいから」

ドキツとした。

寂しい。

ゴクツと喉が鳴る。

その言葉を、トピアが言うなんて思っていなかった。

「……うん。いいよ」

肯定すれば彼の瞳が嬉しそうに緩み微笑みを見せた。最近、成長して抜けつつある幼い顔つきが僅かに見える。

——……トピア寂しいんだ……

悪友兼、親友が離れるという事実。その事柄を漸く、その言葉で認識した気がした。友が離れていく。私の親友は明日から近くに居ない。

——……お風呂は、どうしようってなつてたけど……私も……寂しいな……でも、トピアは、もっと、だよね……

明日からは深い知り合いが居ない場所に行く、トピアの事を考えると胸の内

側が、きゅつとした。

間

カチ、コチ。カチ、コチ。

「何も知らない俺の可愛いナシヤル」

花と何かが混ざった女性にだけに安眠効果があるという良い香りのする蠟燭は今夜も深皿の中で、チリチリと燃えている。淡い橙色の光が灯る蠟燭に照らされた薄暗い部屋の中でトピアは眠るナシヤルに跨り、じつと見下げ微笑む。

幾つものレースで艶やかに作られた女性専用の夜を誘う下着は彼女の魅力を高めるばかりで何も守ってはくれない。

身を下げて寝間着を脱いだ上半身を彼女に押し付ける。むにゆりと白い乳房の形が変わった。

「……」

すうすうと吐息を立てる彼女の唇を口で軽く押す。優しく、はむはむと挟んでは楽しんで舌を、ゆつくりと息を塞ぎ押し込む。無防備な舌に触れて、ずりずりと合わせる。

ちゅう、ちゅう。ずり、にち、にちゅ。

暫し静かな夜の室内で粘着質な音だけが響き、ちゅつと顔を上げ彼女の横に額を落としてトピアは深く息を吐いた。

「あああ、してえ……っ」

固くなった肉棒を自分の下の寝間着から取り出すと、ぐいぐいとナシヤルの太股に押し付ける。

「……なんで、お見合いの話が出て嫌だと思うのなら選択に俺を入れないのかなナシヤルは……なんで、なんだろうなあ……」

ナシヤルの下着まで肉棒を滑らせると押し付けては前後に滑らせ身体を揺すつた。

「……う……ふ、あ……っ」

繰り返し繰り返し下着に湿気に滲んだ線が生まれ、その内側を狙い押し込む。すると下着が割れ目に窪み、その中心部にトピアは精を吐き出した。大きく息をして、じっとナシヤルの寝顔を見つめる。

「……可愛いな」

トピアは指先に自分の精液を拭うと眠り続けるナシヤルの唇に擦り付けた。

ぬるりと口紅を塗るように伸ばし、その過程でトロリと中心へと落ちていく。ナシヤルが何かと間違えたのか寝ながら無意識に、その液体を舌で舐めとる。「あははっ」

それを見て、トピアは嬉しそうに笑い。ナシヤルの頬に口付けをしたのだっ
た。

死して概念になり世界の平穩を見届けた先で死の前へと生還

す

【登場人物】

主人公…ファムア♀

薄紫の髪、薄紫の瞳。過去は人の目が見れない地味な子だった。猫背気味な巨乳なので着ぶくれしている。世界が突如現れた魔物によって混乱した際、食糧難にて異種族のリイチと共に爪弾きにされ魔物の餌になり魂が抜けてしまいリイチに取憑いてしまう。しかし世界が穏やかさを取り戻した後、天に召される

かと思えば何故か魂が、あの時代に戻っていた。

一人称、私。

お相手…リイチ♂

黒髪、黒瞳、耳長の褐色。学園の特待生、優秀な子だが見た目の違いで異端として酷く嫌われており、ファムアと共に爪弾きに合い彼女が死んでしまう。が、魂となったファムアに助けられ世界の平和を見届けて老衰し念願の魂だけを過去に生還させる事に成功する。

少々、狂人。

一人称、僕。

モブ…タロス♂

金髪、碧眼、薄茶色サングラス。

新しい時で出会った四年の気の良い先輩。

モブ…イシユア♀

桃色髪、桃色の瞳。気の強い美少女。

青春癩癩を起すが当主になれる器を持っている。

要約すると、お互いが好きすぎるバカップルな話。

一、【死の前へと生還す】

「異端と役立たずは要らないだろ」

「そうね」

「二人分減れば少しはマシかな」

「デブは二倍食うし三人分じゃね？」

「異端が居なくなれば少しは飯の味も良くなるしな」

笑い声。

喧噪、空間、視界、知人だった者達。

私は消えた筈。

何故だろうか。

概念にも走馬灯というモノがあると言うのか。

ぼんやりと自分の手の平を見る。白く日に当たらない不健康な手の平だ。

「おいっ！ ぼーっとしてんじゃねえぞデブ、てめーの話してんだろが」

ドツと音がして横腹を蹴られ床に倒れる。

痛い。

「うそ……痛い……？」

驚いた。衝撃が私の胸の内側を駆け回る。一つの教室内で行われた会議という名の生贄排出。私は一応会議に参加になっているが、この時、リイチは一人で、中央広場に残る残党の魔物と戦っていた筈だ。世界の変化が起きた時、彼は共に教室に入る事さえ許されなかった。

「リイチ……」

私は痛む、お腹を押さえながら立ち上がる。

早くリイチに言葉が言えなくなる前に伝えなければ。

「おい？　なんだ、お前、どこ行く気だ」

気が急いでいれば髪を束で引つ張られ立ち上がり歩き出した身体が傾く。

「煩いな！　この後、ブラックウルフが来て大変な事になるんだから！　追いつくなら、もう、ほつといて！」

生前、私を虐め続けていた彼らを怒鳴りつけ手の力が緩んだので、そのまま

急いで教室を後にする。

「何だアイツ」

「調子乗り過ぎでしょ……」

「気でも狂ったか」

「馬鹿の無駄知恵だろ」

「くそ腹立つ」

出て行く時に、ぼそぼそと罵りが聞こえたが、もう、どうだっていい。それよりも、リイチに伝えなければ。ブラックウルフは仲間を呼ぶ為、先に喉を潰す方がよい。今なら実験室には薬品が豊富だ。その材料で喉を詰まらせる薬品を作る方法を伝えよう。そうだ。後に向かう東病院には薬品は残って無い上、魔蛾の巣窟なので行つてはいけない。それに光の組合は騙っていたので信じてはいけないし、リイチは真つ直ぐな人なので頼まれごとは聞いてしまうし基本信じてしまうし、それを完全に止める事は無理でも助言を先にしておくだけで

も違うだろう。また概念になってから筆記で伝える方法はあるが今は、ブラツクウルフで、リイチが最初の怪我をするのを、なんとかしたい。最初の頃の再生能力は遅かった記憶だし、あれさえ無ければ彼の苦労が格段に減るはず。

三階から校内、突き抜けの中央広場を目指す。途中、取った消火器を持って扉を抜け入り込んだ。

「え……」

私は啞然とする。

何故かゴ布林やブラツクウルフも倒れ、その中央で木刀を手にしているリイチが刃の部分に付着した血を一振りして弾き飛ばしていた。

「リイチ……?」

何故だか分からないが、その後ろ姿は長年連れ添った頼もしい背中に見える。下の中央広場から顔を上げた、リイチは突き抜けの上、三階の私と視線が合うと走り出す。タンタンタンと木刀を上手く引つ掛けて三階まで直接やって

くると私の目の前に降り立った。

「良かった……記憶の少し前の軸に移動したら急な場面に手が離せなくてね」
彼が一步、一步近づいてくる。

「……リイチなの？」

「ああ、君のリイチだよ」

そう言つて笑顔で彼は私を両腕で抱きしめてくれた。

ひゆう、ひゆうつと喉から言葉にならない音が漏れ涙が溢れる。

「うう、ううつ、り、い……ううつ！」

リイチに私も両腕を回して抱きしめ返す。

「はあ……可愛い声……それに柔らかい……」

感動な場面。涙が止まらないし胸がいっぱいだ。温かい、リイチの体温を感じる。

「ファムアの、おっぱいが大きい事は気づいてたけれど、こんなに柔らかいん

だな……」

まって。

「君が生処理器具や愛玩人形に憑依してくれて営みはしていたけど、やっぱり温かな肉体があるって違うね……ああ、でも、あれは勿論、気持ち良かったし満たされは」

「まって、リイチ」

涙が引つ込んで言葉を返す。

「うん、ファムア。そうだね場所を移動しようか確か寮以外に寢床がある部屋は、この学園にも幾つか存在してたよね。そこに行こう」

「いいえ、リイチ」

「ん？」

「今は命を優先しなければならぬ時だし、また今度にしましょう」

「……え」

リイチが驚いた表情をする。黒い瞳に水分が滲む。

「んんんっ……と、とりあえず……この後、無理やり追い出される場面は無くなったので出来れば寮に置いてある荷物だけ取りに行つて学園を出ましようか」
「うん……学園や寮以外で寢床が安定する場所となると……」

リイチが悩みながら私と手を繋ぎ歩き出す。自然と絡められた指が、無機物憑依の時に感じなかった体温と不思議な肌の触れ合いを感じて緊張した。

——……わ、私達は夫婦、夫婦なの……よ、夜の営みは普通な筈よね！ で、でも、今の私は好ましいと思えないし、お腹出てるのバレる！ 皆から何時もデブって言われてたし……せめて、もう少し体型を整えるまで待つてもらわなきゃ……

「いつそ追い出そうとする彼らを追い出すべきじゃないかな……今は、ブラッ

クウルフの群れが来ないわけだし……僕自身、知識の経験はあるけれど、まだ、この身体は育ちきつてはないからね……ああ……でも、そんなお互いを確かめ合うのも楽しいだろうな……ね？ ファムア」

「え？ ええ」

全く話を聞いていなかった。

それにしても若がりし頃の笑顔のリイチが見れるのは嬉しい。確か、この頃のリイチは笑顔なんて存在しない無表情で必死に生きていたように思う。元々、強く有能な人であつたけれど多勢に無勢な心無い言葉や魔物の止めどない攻撃に心も身も辟易して目が死んでいたと思う。

「良かった。ちよつと、この教室で待つててくれるかな？ 直ぐに用事を終わらせてくるから」

「リイチ？」

リイチが手を離して何処かへ行こうとするので両手で腕にしがみつく。

「そ、そんな離れがたいって？ ……はぁ好き」

「え……わ、私も、あなたを愛してるわ」

唐突に好意を言われたので前に筆談でしか出来なかった言葉を返す。

「ああ……あぁっ！ 愛してる！ 僕もファムアを愛してる!!」

叫ぶ、リイチに抱きしめられて唇が私の口に触れた。

ちゅ、ちゅう、ちゅっ。

柔らかい音が繰り返し聴こえる。その音の発生源の触れ合い。唇は外に露出した内側の皮膚故か環境に左右されやすい。お互いを認識して落ち着いた今だが緊張状態の過去の私達は疲れを感じていたのだろう。お互い少し力サついて固めだ。

「……っ、り、リイチ……今は駄目っ」

リイチに教室の机に座らされて抱き締められながらマネキンや専用の愛玩人形の時の様に愛撫される感触の違いを感じながら羞恥に両手で彼の胸を押す。

「……ファムア？」

「そ、その、お風呂入れてなくて……あ、歯磨きだけは、お昼用に常備してるのでしたのよ。で、でも……今は唇も力サついて……だから、えつと……私、ちゃんと身綺麗になってから、あなたとキスがしたい」

「……く、う、ううっ」

リイチは小さく呻くと美しい黒い瞳から涙をポロリと溢した。

「え、り、リイチ」

「なぜ、何故だ。何故、君はこんなにも愛おしいんだ……ああ、あの初デートの時も、表情は変わらない筈なのに、あまりにも愛らしくて僕は、こんな破壊力のある攻撃は初めてだと思ったものだけど」

「え、え……？」

「過去、僕らにとつての未来の今、新たに更新していく君の愛らしさには脱帽だ」

「そ、その、あ、ありがとう……？」

「ああ！ その表情も可愛いっ！」

「ひえ」

リイチつて最初から、こんなにテンションの高い人だっただろうか。戦闘時は少々違うけれど、どこか大人びて内に何かを秘める彼の助けになりたいと常々、思っていた。そんな彼の内心を暴露され、それが好意的なのが知れて正直、嬉しい。嬉しいけれど恥ずかしい。どうしたら良いの。

「ふふ。ファムアが喋ってる……表情が変わって可愛すぎるし香りがするのも嬉しいし柔らかくて温かくて……」

「んうつ」

リイチが私を抱き締めている腕をクロスさせて、お尻を揉んでくる。お腹よ

りはマシだけど、そっちも、もう少し引き締まってから披露したかったというか。あと、昨日、寮には戻れず、お風呂入れてないので嗅がないで欲しい。確か、あの時トイレで常備の汗ふきシートを使って身はマシにはしたけれど髪は洗えてないし。

「嗅ぐの、やめ」

「でも……確かに、ファムアの初めてを、ここで散らすのは嫌だな。先ずは整えた部屋……寝台を……」

いけない振り出しに戻っている気がする。

「り、リイチ！ 私、あなたの良いところ覚えてるから立つちやったの手と口でするわ！」

「ええ!?」

リイチが目を見開いて驚いた後、カッと頬や耳を染めたのを見て、私も身がグリーンと朱く染まっていく。無機物に憑依していた時は、こんなに身が熱くなっ

て汗が滲むなんて無かったのに。

「……あ、い、いいの……？」

「う、うん。もちろん」

ちよつと視線を逸らしつつ太股に感じる彼の布越しの固い部分を脚で撫でる。

「……んっ」

リイチの身が熱くなつていくのを感じながら両手を伸ばし彼のズボンのチャックを少しずつ下ろしていく。見えたのは常備、売店に売っている黒い男性用下着だ。確か運動部の人達が定期的に買っていた。リイチは差別にて肩身が狭く運動部に所属できていないけれど剣技は自主的に磨いていたので、よく汗をかいていたなつと思ひ出が蘇る。

「……ファムア」

リイチが私の背中を撫でながら顎を肩に乗せ息をし眩きと温かい呼吸が私の耳を刺激して身が、ゾクリと震えた。リイチの膨らんだ下着の先っぽは湿つて

いる。指先平で撫でてみれば少し粘着く感触がした。

「つ……」

ゴクリと唾を飲み込み排泄をする為にある切れ込み横から指を入れ進むと竿に触れ熱気を感じる。そのまま竿を伝ってカリの部分に辿り着くと指平で撫で、ぐつと内側から取り出した。

「……は」

リイチが私の首筋に唇を押し当てて軽く吸い始める。マネキンや愛玩人形の時も、そうする癖があつたなつと懐かしさを思い出しながら手を動かす。マネキンの時は何時も動かしにくく愛玩人形になつてからは改良が重ねられたが人として触るのは初めてで、とても動きやすく内心、驚く。過去に生きていた時は人に怯え固く重々しい脂肪の塊だと思つていた手は全く違う。

にち、にち。

彼の先つぽから滲む透明な液体を手の平を丸めて撫でり皮ごと、ぐぬりと下ろしていく。リイチの大事な場所を意識して見たのは確か彼に取憑いて四季が巡った頃だったろうか。

戦いで崩れた街が、ぱらぱらと落ちる白い雪で埋まり、その日は建物の一角に籠って、じつとしていた。そんな静かな彼が吐息を溢し徐に毛布の中で手を動かし始め。そんな毛布に入り込んでいた私は薄暗い中の、ソレを見つめた。輪郭が膨らみ手の内側で固くなり、ぐにぐにと皮が上下に移動する。その光景は私にとって衝撃的で毛布に飛び散った液体に魂ながらの高揚感が生まれた。まだ、その頃のリイチは常々、私が彼の側の何かに憑依しているとは知らなかったように気が向いたら要る何かぐらいに思っていたようだ。

「つ……ふあ、むあ……で、る……つ」

懐かしみながら手を動かしていれば、リイチが私を抱きしめる腕に力を入れ

て、ぶるりと震えた。温かな液体が私の手の内側に跳び、どろりと垂れる。

「ちゃんと出せたね、リイチ」

空いている片手で、リイチの背中を撫でながらそう言えば、彼は無言で私の肩を吸い上げた。少しの痛みの後に温かい湿気った弾力が皮膚を撫で、リイチの舌の感触は私を不思議な気分させる。リイチの身が上がり背の高い彼が私を潤んだ瞳で見つめ。私は汗の滲む彼の額を親指の平で軽く拭い机から腰を下ろす。

「さあ、リイチ。次は、あなたが腰かけて」

「……うん」

濡れていない片手で彼の手を掴み机ではなく椅子の方にリイチを座らせる。長い緩やかに曲がる教室内の一つの椅子の縁で私は敷布の上に両膝を乗せ彼の開いた膝の間に身を入れた。顔を下げると自分の髪が横に垂れてくる。目覚めてから少々、色々あつて三つ編み一つだった髪は髪留めから漏れてしまったよ

うだ。

「リイチ、私の髪を結び直してくれる？」

「ん……ファムアの髪は柔らかいね」

濡れていない片手で取った簡素な髪留めをリイチに渡すと彼は両手で私の頭部に触れて髪に指を通す。頭皮に触られる心地良さを感じながら私は彼の出した液体で、もう一度、固いままのモノを握り撫でる。

「……っ、今度、君に似合う髪留めを手に入れよう」

「ふふ。楽しみ」

雪の日に自慰をしてから、リイチは静かな暇な瞬間になると三、四度は吐き出すのが日課になっていた。私がマネキンや愛玩人形、初期の頃は愛玩道具に憑依してからは自慰は無くなり、そちらで好きな時に堂々と致すようになったので数日に一回が毎日に変わり、そこからの数はよく覚えていない。年代が上がるうと一日一回は、していたと思う。夫婦になって、しなかったのは最後の

死に際の数日ぐらいだ。

「ああ……ファムアが僕のを……うあ……んっ」

舌を伸ばし彼の立ち上がったままの肉棒の先っぽを舐める。少しの苦みを感じた。口付けをした時も久々な生物的な香りに驚いたが、こちらの明確な味は長年忘れていた味覚で胸が高鳴る。瞼を睨り大きく口を開けて形と味を確かめていく。口内に感じる大きさ窪み、つるりとした所、塗り付けた精液の苦みとは違う新しく滲み出たしよっぱさ。舌平全体で撫で味わう。

ぬち、ぬちゅ、ちゅる。

「……ファムアの口の中、す、す……いっ」

私の口内でリイチの肉棒が自ら反応を示す。舌を丁寧に動かし暴れる肉棒を噛まないように最大限、気を付けながら頬裏と舌で包む。リイチの両手が震え

ながら私の頭や首の甲を撫でた。好感触に今度は反対側の頬裏で刺激する。憑依の頃の知識だけはある生身の身体でするのは初めてだったが悪くないようだ。ホツとしながら舌の疲れから正位置にして舌と唇を使って全体を吸いながら舐め上げる。

「……ファムア、ふあむ、んあ、ああ……っ！」

力が入ったのかりイチは私から手を外し自身の片腕を握りしめながら、その手に噛みついて朱い顔から汗を、ぽたりと垂らす。目だけで、その光景を一瞥して再度、瞼を瞑り集中した。どくりつと勢いのよい液体の塊が私の口内に広がった。

「んう……」

ごくり。

無機物の時とは違い私を押し付けなかったリイチに感心しながら喉を鳴らす。出たては少しお米の、とき汁のような穀物の風味と似ていて奥から生物の苦味や生臭さを感じた。

「……ふう……リイチ、次は」

粘着いた液を飲み込んで垂れた唾液と白濁が混ざり薄まったモノが付いた竿を軽く舐めながら三回目 hands と口、どちらが良いかと訊こうとして。

「ややや！ やっぱ、おっぱいやろ！ その巨乳、使わん手はないし！」

「!?」

がたんつとりイチが私を庇いながら立ち上がる。下着ごとズボンが脱げているので彼の引き締まった尻が目の前になった。勃起したまま揺れる肉棒を見て私はポケットからハンカチを取り出す。生きている頃に入っていた丸い小蛙の柄だ。

「誰だアンタ……っあん……」

後ろから彼の太股や睾丸を拭き竿を拭けば、リイチが小さく喘いだ。

「あはははっ！ 有能な後輩の情報があつたけど、やくこんなエロい後輩カツブルおつたん！ オレ知らなかったし！」

何故か分からないがズボンの前側を開けて薄茶色サングラスを装着した彼も立ち上がった肉棒を出したまま喋っている。何時から居たのだろうか。

「ごめんなさいリイチ、私、今の身体になって忘れてたけれど周辺探索の能力が……」

「君が生きている事が一番だから、そんな事、気にしないで……んっ」

下着を上にし、まだ萎えていない肉棒を収めてズボンも上げる。上のボタンとベルトはしまえるがチャックは厳しいようだ。でも、とりあえずは動けるだろう。

「ああ、お二人さんも能力に気付いたたち？ オレもねー気づいて面倒や思つて隠れたまま休んどつたら二人来て、いちやいちやるやん？ ついオナるよ

な」

「いやいや……」

「先に、いらつしやったんですか……」

リイチが机と椅子の間に掛けていた木刀を手に握りしめる。

「ああ気づかんかったのは仕方ないから安心しい。オレの能力は多分、隠蔽やな。拡散もかもやけど」

肉棒を、ぷらぷらさせながらチラチラと薄茶色サングラス下の視線を向けて別の机の上に座る先輩らしき人。発言と服に付いた学年を示す色で判断する。私とリイチは二年生で橙色、彼は黄緑色なので別学年だ。記憶が少し曖昧だが最上学年の四年生だったかと思う。主に仮就職先候補に研修に行つて学園にはいないが。

「はあくええなあ。オレも可愛いくて、どエロい彼女欲しいし」
溜息を吐きながら自分の肉棒の先っぱを指平で撫でる先輩。

「……しまつて頂けますか先輩」

リイチが低い声で言う。

「ええ？ 自分、棚上げ？ ええけど入るかな……」

下着には収めたが、チャックが上がらないらしい。すぐに諦めて先輩は笑いながら語る。

「知らんかな、舐めてくれた上に飲んでくれる女の子って中々おらんのよ。貴重やし大切にな」

「……言われずとも僕はファムアを愛していますので」

「ふうん？ ふーん？ リイチとファムアちゃんやね。はあ、あとちよつとでイけたし、もう一度する？」

「遠慮します」

「えゝはあ。何か宝物庫から選んでオナるかあ……この興奮の後に滾れるか否か……」

「……じゃあ僕らは失礼しますので」

「え、何処に？ 一緒に行くし」

「いや！ 面倒で、お一人になったんでしょ、それを貰いてください！」
リイチが叫べば先輩は笑う。

「あ、オレの名前はタロスね。よろしく」

握手の為、両手を広げて差し出されるが、お互いアレな後なので、どうかと思ふ。

「はあく花娼は、この騒ぎになったし開かんやろうなあ。心から悲しい……」
握手が行われなかった事を気にする風でもなく手を引っ込めて会話を一方的にしだすタロス先輩。

「今の気分は宝物庫じゃなく生身の子とスコバコしたいし」

「……勝手に探してすれば良いでしょ僕らに付いて来ないでください」

「まあ探せば今やと食堂や購買辺りに人が陣取つとるし出来るとは思ふ、思ふ、

がつ、好みじゃないんだわ」

「知るか」

「聞いて聞いて最近の子って細身重視やん？ その所為で出るとこ出なくて飢餓状態みたいなさあ。ファムアちゃんみたいに柔らかそうな子が好みなわけよオレ」

「聞きたくないし不愉快だ」

リイチが木刀を持ち上げてタロス先輩に向ける。しかし先輩は笑顔のまま。
「……私は、おデブなので……えーつと変わった趣味をお持ち何ですね」

「まって、ファムアは素敵だからね！ というか、アイツらだよな！ くそ、前の時の事もあるし今から始末しにく……」

「あはは。着膨れで分かりにくいやろうけど、ファムアちゃんはグラマーっての。くびれあるし」

リイチが、カッと目を見開く。

「うーん、する時って柔らかさが弱いと、お互い痛かったりするし、まあ……そこは好みっちゃ好みやけど、リイチから好き好き出とるから気にしなくて良いんやない？」

「……そ、それは」

チラリとリイチを見れば少し不服そうな表情をしながら無言で手を握りしめてきた。

「というかアイツらって？ 何、いじめられてたの」

「……っ、はい……でも、もう良いんです。リイチに出会えたので」

「ほーん？ マジか。健気風味……何か情報わたすからさ一度おっぱい使わせてくれんかな？ ダメ？」

「何を言ってるんだ、あんた！ 駄目に決まってるだろ！」

「えー最後までではないからーん」

「私も遠慮したいです」

「がーん。
あ、二人お腹空いてない？」

サキュバスの食欲

登場人物

マリア（TS元男の転生サキュバス）♀

元、地球産地の男。異世界転生したらTSしてサキュバスになっていた。自由に食べ放題で生きていたからか飢餓に切れて前世を思い出す。しかし捕まって精神治療（性的）で人と交流していく内に、ちよつと他者に対して情が生まれて最近では腹八分目な食生活。

一人称…人前だと基本的に私、心の中は混乱の最初以外は俺

ジャン♂

マリアに惚れてる魔力能力が高い高級取りな男の子。日々、忙しいがアプローチは忘れない。

一人称…オレ

妖精先生♂

可愛い妖精先生。お仕事や人間関係に疲れる日々だったけれどマリアで発散してからは何時も楽しそう。

一人称…私

蜥蜴君（リーフエ）♂

周りの悪意や悪戯に疲れた生徒。マリアで生き方が前向きになる。婚約者は、

スモちゃん。ちんぽ二本生えている。

一人称…俺

子豚ちゃん♂

マリアのペット。

一人称…目上には私、基本は俺

植物学先生♂

婚約者に逃げられて人間不信、女嫌いになったが、マリアで復活する。

一人称…表面上は私、素は僕

スモちゃん♀

マリアを慕っている可愛い女子生徒。婚約者は蜥蜴君。

一人称..私（わたくし）

触手ちゃん

液体が、ぬるぬるしている。マリアのオヤツであり非常食。

モブな部下達♂

マリアはサキュバスだ魔物だと罵ったりするが美味しく食べられる。

*

0話 異世界転生をしていたらしい

特殊能力。

異世界転生というものをしたというのに気がついたのは初めて能力を使った時だった。

俺、否、私は、どうやら創作の中にだけ存在すると思っていた生物が多種多様にいる世界で新しい性を歩んでいるらしい。

生？ 性をね。

私が産まれ変わった生物、それは。

「う、あ……や、やめっ、あっ♡」

薄暗い室内。湿った石畳の上で眼前の人間の男が呻く。余分な脂肪がついた肥えた男だ。自警団らしい帽子を脱げば禿げてるのではと予想する。いや、肌

は若いからそうでもない？

「く、う……ば、化物め……あう！」

自警団の肥えた男が脂汗をかき、全身をビクビクと激しく痙攣させた。イツたらしい。私の下に熱い液体。膣内に広がった精液が身に味わいを与える。予想していたが、やはり。

「揚げたチキンに近い味……あん……美味しいー……♡」

私も記憶が甦る前の生活で慣れた行動に今更、貞操概念に悩まされる事はない。

「ん……臆病で……肥えた男だからかな……？」

壁に尻を深く押し付けながら考える。

「筋骨隆々な殿方は、どちらかという……ステーキだったし……あー……偏食ばっかりにハマっちゃいそー……♡」

果たして。この身体だと肥えるという事はあるのだろうか。

「あはっ♡」

壁から尻を持上げると床に尻餅を着けて喘いでいた男が、また喘いだ。

「ば、化物め……」

目に涙を浮かべている男。前世ならば、全く触手は反応しなかった相手（男）だが今は違う。アレは美味しそうな揚げチキンだ。少々レモン、すだちでもカボスでもいいが、あれば、もっと美味しく食べれるのに。その場合。

「健康思考のご老人とか……？」

壁から生えたイチモツを撫でて、キスをしながら考える。この能力があれば、もしかして。

「う、あ……サ、サキュバス……も、もう止めてくれ……これ以上吸われたら……あっ♡」

無視して持ち上がったままのイチモツを舐める。

「だーめ。足に魔力封じの枷なんかして牢屋に閉じ込めて、どれだけ絶食状態

だったか分かる？ 目の前にご飯を見せつけた貴方が悪いの」

「……そ、そんな……し、死んでしまう……」

青ざめて喘ぐ男を一瞥し笑う。

「大丈夫よ。ちよつと痩せるだけだから」

「ひう♡」

翌日、肥えていた筈の男は平均体重まで減らしたヨロヨロの身体で牢屋の鍵を開け、私に枷の鍵を投げ渡した。

「あら、自警団らしい身体に近くなったんじゃない？ 味も流石に変わっちゃったし……」

両膝を付いている男は、この町で権力を枷にものを言わし、ノコノコとやってきたサキュバスの私を偶然捕まえて一時放置した後。牢屋の外からズボンを脱ぎ、イチモツを見せつけ『ほーら、食いたいだろう？ サキュバスめが！』なんて言うから、飢餓からか切れた。サキュバスにこんな力があるとは思わな

かったが、その激しい食欲に対する怒りで魔力とは違う特殊能力が発動し。そして、同時に前世を思い出した。

「最後にオカズで観たコメディＡＶが至る所からチンコが生えるものだったからかな……」

見つけた時は爆笑しながら電子で買って観ていたら、突然激しい地震がきて部屋中にあつた本棚から本が落ちてきて圧死。身内は高校の頃に唯一の祖父が死んでから居ない人間だったので羞恥死ぬは無いがネタＡＶを最後まで観れなかったのは残念だ。

あの後に俺も。否、今は私か。イチモツを弄りたかったのに。

「か、返して……」

湿った牢屋の石畳に身を屈めたままの男が手を伸ばし、足にすがりついてくる。

ああ、忘れてた。

この男にとっての人質。大切な息子を返さなければ。

泣いている男の額に一つキスを落として、スルリと服が乱れた上半身を撫でて履いていない下半身に片手を滑らせる。

「お腹が空くと、どうも怒りっぽくなるんだよね。ごめんね」

そういつて、男の下半身から消えていたイチモツを元の位置に付け直す。

「でも、今はお腹膨れたから、すっごくご機嫌なの」

元の位置に戻したイチモツは、まだ上向いている。前世の意識が蘇った所為だが思う。

——……サキュバスの能力怖い……

食糧補給は生きるために必要不可欠ではあるが、なんとまあ。何時までも萎えさせないなんて、素晴らしいようで悪夢だ。

昔、転生前の男の頃の記憶が甦る。

——……多くやっても……三回ぐらいだったよなあ……

この世界の人間の回数基準は食べてきた相手によるが、二、三回ぐらいだったのを考えると、まあ、過去の自分よりは耐久力があるようだ。

「……だから」

男の耳元に口を寄せて囁く。ビクツと男が震えた。

「最後に、もーっと気持ちよくしてあげるねー♡」

「ひいひい……」

ネットリと男の精を吸いとった後、地上に悠々と上がると鉄錆びに汚れた服を着た、みすばらしい少年が廃れた建物郡の間から猿の如く出てきた。

「お、お姉さん……！」

はて。

誰だったかと思い、思い出す。

「あれれ、自警団の近くに來ちやつて大丈夫？」

「お、オレ……」

晴れた空。晴天の下、泣きそうな少年。確か、この少年は自分が町に來たと
きスリを働いていた。

「オレの所為で……」

否。

「あら、違うわよ」

肩を竦めて笑う。

「？」

少年が戸惑った表情で、こちらを見上げてくる。

「美味しそうだったから」

すると少年の頬を撫で建物郡の間に入っていく。顔を朱くした少年が後を付いてくるので路地裏の奥まった辺りで足を止めた。

「君を」

振り向いて身を屈め、少年に視線を合わせる。

「え……？」

少年の頬にそつとキスをする、少年は身体を硬直させた。

「食べたくて私、ヘマしちやったの」

「……オレを？」

少年が目を見開いている。

サキュバスにあまり人間の金はない。だから、生活水準が低そうな少年を金で買って味見しようと思っていた矢先。あの男が町の出店にイチヤモンを大声でつけ。少年がその隙を狙ってスリを男に働き先に控えていた、その男の部下に捕まりそうになったのを見て身を滑り込ました。

「そう。折角、先に目を付けてたのに精を吸う前に生を終えられちゃあねー」
部下の町人に容赦ない剣の振り上げは上司の体制の効力か。まあ、無実の人かと思いい部下は顔を一度青くして。でも、切れた背中から羽を見付けて人間じゃないと分かった時の安堵した様子。部下は『サキュバスだ!!』と嬉々として声を上げた。

「……でも残念ね」

「お姉さん……?」

捕まった為に今は持ち腐れていた金がない。上司の言動からしてサキュバスのみ捕まえて興奮していたようだから、あの部下が横取りしたのだろう。

「今は君に払うお金が無いの」

「……」

複雑そうな表情になった少年の頭を撫でて路地裏を出る道に視線を向ける。
一度、無断欠勤をしているという部下の元に御礼参りでもしないと。

「ど、どこを……食べるんですか……」

「ん？」

「み、耳、方耳、小指なら……」

「あら」

少年の発言。どうやら俺が食人鬼だと思ったようだ。食べるのは確かに似てるが。

「い、生きてけるから……我慢します……お、お礼に……」

勇ましい少年だ。自分だったら、そんな恐怖御免だけれど。

まあ。

「本当に？」

少年が決心した目を向け、深く頷く。

——……可愛いから……ちよつとだけ……

少年の耳に息を吹きかける。少年が顔を朱くしながら瞼を閉じた。

「……んっ」

片手で少年の首筋を撫でながら耳の輪郭を舌でゆったりとねぶり。もう片手は少年の背中を撫でながら下に徐々に下げていき、まだ締まっていけない柔らかい尻を支えるように撫でる。

「ねえ……君、名前は？」

「……あ、ジャ、ジャン……」

よくある名前だ。太郎や一郎みたいな感じだろうか。

「あ、う……お、お姉さんの……名前は……」

だとしたら自分も適当に名乗ろうか。前世を思い出す前はサキュバスと呼ばれるか、その場の適当な流れに従っていたし。一つに決めるのも悪くない。

「マリア」

「……マ、マリアさん」

少年が嬉し気な息を吐く。そんな少年の耳の穴の中を舌でグルグルと刺激し、もう方耳に指を一本軽く入れて少し動かす。もう片手は尻を触ったり太股を撫でたり。予想はしていたが案の定、少年の下半身の前側が膨らみ出した。身を擦り付けるようにして太股で、その膨らみを押さえつける。

「あうっ♡」

そのまま少年の片手を持上げて手の甲にキスを一つ。

「マ、リア……さん……んっは……♡」

太股をスリスリと動かして少年の膨らみを刺激し、小指を優しく口に含む。

ちゅ、ちゅる。

小指をアレを舐める時と同じ様に舐め、疑似的に吸い上げる。たったこれだけだが少年は自ら腰を揺らし始め。

「あらら、もったいない……折角こんなに美味しいのに」

耳と指だけの味見で止めておこうと思っていたが出すなら食べるべきだろう。少年のズボンの間に手の平を滑り込ませ温かいそこをスリスリと撫でると。

「あ、あ、あ……♡」

少年が瞑っていた瞼を薄く開き潤んだ瞳に焦点を付けず口を半開きにして喘いだ。

「気持ちいい？」

「……あ、はっ、はい……♡」

ズボンを徐に脱がすとボロンと出て来た成長途中のそれに頭を下げ口にパクリと含んだ。

「はぁ！」

少年が腰を一度後ろに引くので両手で腰を押さえつけてグツと喉に向かわせる。舌を張り付かす様に動かして吸い込みを強くすると少年の腰はガクガクと震えた。

「く……あ、あ、うあっ♡」

先程と反対で、少年は腰を前側に突き出し喉奥に先を入れ込もうとする。ただ大人と比べて小さいので奥には入らず手前で熱い精が吐き出され。それをゴクゴクと喉を鳴らして飲むと頭上で気持ちよさそうな少年の呼吸が聴こえた。

耳と小指を食べられないと知った少年は『そんな！ お礼になりません！』と叫んで付いてくるが、十分十分。

「ジャン君には将来性があるから、このまま魔法学園の門を叩くだけでも学業に付けれると思うよ」

「え……オレが？」

「私、サキュバスだから分かるんだけどね。君の魔力は質も量も、とても良くてね……それが精と混ざってくると最高に美味しくて……」

「……」

少年が顔を朱くして黙り込む。恥ずかしいようだ。その初心さも食べるといってなんだが大人としてニコニコしてしまう。

「ああいうチキンはギリギリまで搾り取るのも乙だけど、まあジャン君の場合には、そうね。将来、いい官僚にでもなった時、サキュバスでも住みよい国にな

るよう頑張るとかしてくれたら……」

それは求めすぎだろうか。

「まあ、本当に充分だから……あれ？」

そんな会話をしながら、あの部下の住む家に着いてみれば目を瞬かせる。

「火事？」

建物が最近燃えたであろう残骸で崩れている家。その周りで浮浪者が物探しに明け暮れている。

「あれ、だから無断欠勤かー」

軽く手を合わせて黙祷を捧げ顔を上げると。ふと、横から少年の強い視線に気が付いた。

「ん？ どうしたの」

「……マリアさんは、女神を信じるんですか」

「あ……うーん」

そうか、サキュバスが神に黙祷するなんておかしいか。

「あはは」

「……」

不思議な眼差しだ。

「んー私、今はサキュバスだけど、元人間だからかな……やっぱ、人の死には罪悪感なのか寂しさなのか……うーん、手ぐらいはね」

「……マ、リア……様……」

「え？　さま？」

「人に恋慕し……身を天界から落とし……名をマリアとして生きた娘がいると、昔の書物で読みました……」

「……んん？」

書物で読んだ？　この町に図書館なんてものがあつただろうか。しかも、また変わった物語が。

「しかし、その後……罪により、その娘は記憶を持たなかった為、愛を告げる事が叶わず、その生を終えたそうです」

「そ、そうなんだ……悲恋だね」

なんだか、ジャンはロマンチストみたいだ。まあ、適当にマリアとした自分が勘違いを引き起こしてる分けたが。もっと、意味の無い感じの名前に変えようかな。

「見つけた！」

数人の浮浪者がわらわらと金目の物を見つけ、嬉し気に抱えている。あれは。「あー……」

自分が食べた男共から貢がれた品々だ。焼けて灰になっていなかったらしい。

「……マリア様の？」

「え？ あ、うん、まあ、もういいよ。また金持ちが貢いでくれるだろうし」
「……貢ぐ？」

少年の視線が鋭くなった。軽蔑されただろうか。それはそれで、仕方がない。
「生きる為には程良く食べなきや駄目だから食べてる序に性格いい男がくれる
のよ、ふふ」

「……じゃあ、あなたのだ」

「あはは、まあ、そんないるものじゃ……え？」

グルルつと音が鳴りそうな強い風が吹いたかと思うと、浮浪者達の腕の中から
金目のものが弾け宙に浮かんだ。

「わ」

呆気にとられる。

「マリア様」

「……えーっと」

目の前に差し出された塊の私物。この子は。

「あーんつと……もしかしてだけれど、私……勘違いしてた？」

「いえ」

ジャンが笑顔で否定する。

「オレがフリをしていただけです」

「……」

「オレ、帝都から派遣された視察官なんです」

晴天の下、輝くような笑顔が急激に背中に寒さをもたらす。

「荒れたこの町の視察に来て、おとり捜査をした所、まさかサキュバスがオレの身代わりに命をはってくれるなんて……思いもしなかった」

「あー……あはは」

「背中、痛かったでしょ？」

「え？ あ、まあ……私、化物だし」

「……美しい」

「へ？」

うつとりとしたジャンの眼差し。

「サキュバスとは、ただ男の精を貪る恐ろしい生き物だと聞いていましたが、改める事にします」

「あ、ハイッ」

思わず背筋を正す。これは、この魔力量は美味いと思っていたが、子供だから主導権を取れると思い舐めていた。不味い。このままだと、捕まって逃げられなくなる可能性がある。田舎の自警団と帝都とはレベルが違う。完全に負ける。

「まあ、これは、その、この町の再建築費用にでも使ってください。という事で私は……」

ガシリッ。

逃げようとして何故か金目の物を持っていないのに浮浪者に身体を捕まえられる。

「隊長、サキュバスは己の魅力で男を騙すものなんです」

「あれ？」

よくよく見ると付け焼刃の様な灰で汚した服や顔。臭い臭いもしない。何、
どういう。

「彼女は違う。そう、オレは確信した」

「隊長ー」

一人が顔を拭いながら困った顔をしている。

「見たでしょ、あの豚の汁をこれでもかって吸い取っていた様を」

「命は取らなかつただろう」

「まあ、あれだけ食えば……」

「優しいんだ彼女は」

「はあ？　優しいサキュバスとか」

片側で腰を捕まえている男が声を上げて笑いだす。

「彼女の慈愛は母なる海のように美しい」

「え」

「ぶはっ！　隊長、なに、惚れたんですか！」

「あーあ、そこは、まだ子供ですねえ」

「あの……」

こちらを無視して会話をする面々。どうしようか。あの移動させる能力を使う？　否、この人数相手は流石に無理じゃないだろうか。

「それに、サキュバスにしては不可思議な能力も持っています」

男の一人がジロリと睨んでくる。

「身体の一部を移動させるなど……」

発言からしてサキュバスと知りながら全部見てたのか。だから、捕まえてか

らしばし放置された？ サキュバスを判断する為に？ それとも他の理由が。

——……まあ……理由なんて、飯さえ食えて、のんびり生きていければ……

「すまない」

ジャンがそつと手を握ってくる。

「あなたがサキュバスだと分かった以上、管理下に置くか処刑するかのも二択とされる」

「わあ、厳しい！」

「サキュバスで精を取られて死ぬ男は多々いるからな。選択できるだけマシだろ」

腰を掴む男が皮肉気に言う。

「えー……じゃあ、管理下で？」

死にたくないので選択すれば男が目を見開いた。

「軽い！」

「え、何が」

「普通、ここで抵抗して、逃げる為に俺達の精を吸い取るとかするだろ」

「吸われないの？ いいけど、もう少しお腹空いたらね」

「……」

黙り込む男。

「ああ！」

ジャンが何故か突然、天を仰いだ。

「いいっ！」

「ジャン君？」

「ちよ、隊長、何サキュバスに本名教えてるんですか！」

「国に付けられた名も大切だが、彼女にはオレの全てを教えたい」

「あー……駄目だこりや……」

「ベタ惚れだな」

合計、六人の男達の嘆きやら騒がしい様子を一瞥して空を喘ぐ。

——……毎日一回は食べさせてくれたらいいんだけど……

空は相も変わらず眩しく程よく晴れていた。

社畜がある日アリスになった 1

《猫と番になって帽子屋で飼われたアリス》前編

カツンツ。カツンツ。がこんつ！

出勤。行かなければいけない。行かなければ私がやらなければいけない。

「え………？」

ずっと慣れないヒールが排水口の溝に、かかったと思い下を見ると白い床石で私の靴は青いパンプスだった。疲れているのだろうか。靴を履き間違えて出

勤してしまつたらしい。

「出勤……どこへ？」

ぼうっとする頭を捻つていると横奥に大きな鏡が見えた。無言で近づく。鏡には年頃の娘がおり青いスカートの膨らんだワンピースに白いフリルのエプロン。腰には大きなリボンが付いている。

「え、私？ 何、この恰好……」

しゃがみ込み、ぴつたりとした縞模様の靴下を何となく触る。

「……私って……こんな感じだったかな？」

鏡を、もう一度見上げれば金髪碧眼の娘。

「こんな感じだったような気もするし違うような……」

「ああ！ 遅刻してしまいます！ 急げ急げっ」

「えっ」

声がして後ろを振り向くと二頭身の可愛らしい白兔が小さな扉を通つて外に

出る所だった。

「う、うさぎ？」

唾然と眺めていれば兎は外に飛び出て扉が閉まる。慌てて近づいて扉を開ければ外下には階段が見えた。

「あれ……？ まって」

ハツとして今いる部屋を見渡す。扉は、この小さな扉以外見当たらない。

「うそ……出られないんじゃない？」

身が、ぞわつとした。小さな扉は兎なら容易に通れたが私には無理だ。太股や肩で突つかかるだろう。

「す、すみませーん！ 誰かいませんか？ すみません……！ 誰か……！」

何度も外に呼びかけるが木々のざわめきが聴こえるだけだ。返答は無い。

「そんなあ……」

気落ちして無暗やたらと白い部屋を歩く。歩けば机が一つあり机には『わた

しをたべて♡』と書かれたチーズと『わたしをのんで♡』と書かれた赤ワインがあった。

「食料……」

この皿に盛られたチーズとボトルに入った赤ワインを飲んで待つていれば誰か通りかかるまで待てるだろうか。

「……ちよつと変だけど乾いてないし用意してあるってことは人が定期的に来るって事だよな？」

チーズを触り表面が柔らかく、そんなに時間が経っていないという事が予測される。

「叫んで喉は乾いてるけど……お酒で潤うかな……」

空のひっくり返してあるグラスに赤ワインの捻るだけの蓋を開けて中身を入れた。

「コルク式じゃなくて良かった……」

ちよつとした都合の良さに少し気分が上がりながらワインを舌で軽く舐めるだけして、もう一度部屋を見渡してみた。壁を叩いてみても同じ音がする。

「ふう……」

鏡を少しの間見つめて唯一の扉前へ赤ワインとチーズを持って座り込み景觀を眺め。もう一度、赤ワインを舐める。

「お腹は、まだ空いてないし……あれ？」

ふと、扉が少し大きくなった気がした。首を傾げてワインを今度は一口飲む。チーズも一口食べる。

「あ、食べちゃった……無意識ね。ワインとチーズって合うから……」

一口食べると、チーズの美味しさに舌鼓して、ついつい食べてしまう。

「あれ……？ 扉小さくなった？」

ワインを飲む。ちよつと飲んだだけだが、もう酔ってきたのだろうか。

「それにしても美味しい……こんなに、のんびり景色眺めてお酒飲んで過ごすつ

て何時ぶりだろう……ん？ 何時って……」

何か自分の独り言に違和感を感じる。

「まあ……いっつか、悩んだって碌な事にならない気がするし」
飲んで食べて味わってを繰り返していれば日が暮れてきた。

「……今日は此処に泊る事になりそうね」

そう呟いて酔いがきた私は瞼を閉じ、その場に横になったのだった。

「トイレ……」

お酒を呑み過ぎたらしい。目が覚めて尿意を感じた。しかし部屋を見渡しても何も無い。トイレは無く、しかも。

「全部、飲んで食べちゃった……私の馬鹿……」

気が付けば皿いっぱいにあったチーズもボトルのワインも飲み切ってしまった。小さな扉を見て考える。

「そこからしたら見つけてくれた人に恥ずかしくて顔向けできないし……」
空のボトルを見た。

「口元が小さくて……狙い定まるかな……」

部屋の大きな鏡に、ふらふらと近づいてスカートの下から白いショーツを脱いだ。スカートをたくし上げ自分の割れ目を見る。少し茶色みを感じる金色の毛が割れ目に生えており片手で、そこを広げた。皮の被った桃色の小さな陰核、ぴったりと閉じた膣口。

「えーっと……おしつこの穴は……ここ？」

陰核下の小さな穴を見つめ狙いを定める。しゃがみ込み尿が出てくるだろう穴に空ボトルの口を合わせて、お腹に力を入れた。

「う……上手く出ない……っ」

ふうふうつと呼吸を繰り返し覚悟を決めて鏡を見ながら尿を出す。

ちよろ……ちよろろ……じよろろろろ……っ

最初は滲み出た尿だったが一度出始めたら勢いが止まらなくなる。

「……んっ、っ」

ちよろり……ぽた……ぽた……

「よ、よかった……こ、零れてない？」

ボトルの半分を埋めた自分の尿を見ながら蓋をキツチリと閉める。

「これで、よし……」

「処女の放尿瓶は売れそうだにやあ」

「へあ!？」

少年の声変わり中のような声が聴こえ身が跳ねる。

「え……ね、猫……?」

見れば私の隣に大型犬ほどの赤紫の、ふわふわ毛の猫がいた。

「あ、あなたが喋ったの?」

「そうにや。にゃーは、チエーノ・ログリゲス・シヤノアール。周りからはチエ
シヤと呼ばれているにや」

「チエシヤさん……」

「呼び捨てで良いにや。それより、それを売ってほしいにや」

「え……それって……こ、これ……?」

私は自分の汚物と化したボトルを持ち上げた。

「新鮮だし可愛い娘つ子の処女放尿ときたら帽子屋が喜ぶにや。何でも無い日

のパーティーに持って行こうかにや」

「……にや」

「にやん？ アリスは雌猫だったにや？」

「え……あ、いえ。えつと、アリスって私の事？」

「にやん。リボンに名前が付いていたにや。違うにや？」

「リボンに……」

鏡に背中を向けてみると大きなリボンに『アリス』という大きな文字が縫い込んであった。確かに、これを見ればアリスと分かるだろう。

「ほんとだ……私、アリスっていうんだ……」

「アリスって変な雌猫にや」

「あ、えつと……ごめんなさい」

「ふにやにや……謝るにや？ 変にやー」

喉を、ごろごろ鳴らしてチェシヤは楕円形の瞳を細める。金色の瞳の中に漂

う緑の光が揺ら揺らゆれて綺麗だ。

「……あの」

「にゃーん？」

「こんな汚いのが欲しいんですか？」

「汚くないにゃー帽子屋は大喜びするにや。にゃーも嬉しいにゃん」

「……えーつと本当に、こんなので良ければ……その、ここから出るのを助けてくれたらと思います」

「にゃ？　ここから出たいにゃ？」

「はい。私、大きすぎて出れなくて」

チエシヤは不思議そうに首を傾げて私の手元のボトルを見る。キョロキョロ動く瞳は動く度に部屋の天井の不思議な仄かな明かりや外から漏れる月明かりを集めて光り綺麗だ。

「それを飲んだのに出れないのにゃ？」

「えっ、これを……？ ワインの事ですか」

「それは身体が小さくなる飲物にや」

「えっ！ でも、私は変わらないですよ……」

「ふにや、ふにや……チーズと食べたにや？」

チエシヤは私に近づいて匂いを嗅ぐと、ぽつりと呟いた。

「た、食べました……」

「チーズで身体が大きくなってワインで小さくなるにや」

「それは……えつと……まさか私、相殺した……？」

「そうにやる」

「……じゃあ出られない？」

「にやあ……今から、それを持って帽子屋の所に行って交換してくるにや。帽子屋にやら似たようなのを持ってると思うにやー」

「えっ、でも、これが報酬なら……」

「もっと喜ぶ方法があるにや。まっててほしいにや」

チエシヤは両手を私の肩に乗せ頬を、ザラリと舐めると器用にボトルを持つて小さな扉を、するりと潜り抜け走り去ってしまった。

「……」

私は一抹の不安を抱きつつもチエシヤを、うとうとしながら待ったのだった。

「これは、これは」

目が覚めると夜が明けようとしている時間帯だった。薄暗い朝日を背に深い紺色のタキシードにシルクハットをかぶり顔には目元を隠す白い笑顔の仮面を着けた男が小さな出入口前の階段に座っており。瞼を開けた私は横になったま

まチエシヤに頬を、ザリザリと舐められていた。

「お初にお目にかかります。美しいお嬢さん」

「あ……お、おはようございます。えっと、アリスといいます」

「うんうん。素敵な名前だね。アリス君」

「アリス、お尻を帽子屋に向けるにや」

「お、おしり？」

「お薬を帽子屋がアリスに入れるにや」

「お薬……？」

チエシヤに、ぶにぶに肉球とふわふわ頭で押されて開いた正座でお尻が扉前に鎮座する。

「大丈夫。座薬は小指程度だ。ただ、ちよつと解さないと入らないね」

「あ、あの……っ、自分で……ひゃんっ！」

「おや、これは良い」

ぺろ、ぺちゅ。ぺちゅ、ぺちゅり。

捲られたスカート下のお尻に温かく弾力のある滑りを感じた。それを感じて夜にショーツを脱いだままだった事を思い出す。ショーツは、ポケットに入れっぱなしだ。

「や、やだ……舐めちゃつ、ふぁ♡」

「落ち着くにや。薔薇の王の騎士が日が明けたら、ここに巡回に来るから勝手に飲食した事がバレる前にずらからにやいと首が跳ねられてしまうかもしれないにや」

「え……あんっ♡」

首を跳ねられるとは、どういうことなのだろうか。怖すぎる。食べて飲んで書いてあり良いと思い込んでしまっていた。あれは無銭飲食という事か。

私は斬首刑の犯罪をしたのか。

ぺちゅ、ぺちゅ、ぬるり。

「ふあ……♡ チェシャ……こ、こわいよ……」

目の前で私に肉球を押し付けていた、チェシャに両腕を伸ばし抱きしめる。

「にやふっ」

チェシャの尻尾が一回上へ膨らみ、じつと綺麗な瞳で私を見返す。

「積極的にな……」

ふわふわな尻尾が私の頬を撫でた。滲んだ涙がチェシャの尻尾に染み込んでいく。

「帽子屋、騎士が来る前に終わらせるにや」

「むむ……処女アナルを解す楽しみが短時間しかないとは……」

ぬぷり……

「ひつ、な、なにか……入ってきたあ……」

「はあ……この乳臭い未通も桃色で、なんて美しい……」

「ひやう♡ やあ……♡」

ねろ、ねちゅ。ねろ、ねろ。

「今は急ぎにやー楽しみたいなら屋敷に行つてからにすると良いにや」

「あ……あ……っ♡ おしり、の……大きいよお……♡」

「アリス小さくなれてきたにや」

元の私では小指程度だった座薬が小さくなる事で大きさが増していくのを感じ

じる。

ずるり。

帽子屋は小さくなった私を扉から抜き出して腕に抱いた。

「見ておくれよ、チエシヤ君！ 先程まで未通だった処女アナルが無機物で、ばんぱんだ！」

息を荒げる帽子屋は高そうなズボンの前を大きく膨らませ、そうチエシヤに話しかける。チエシヤは鼻を、ひくひくさせ三角耳を、ぴこぴこ動かしながら私の脚にふわふわの尻尾を巻き付けた。

「あと五分もしたら赤薔薇王の騎士がくるにや。抱えて逃げるにや」

「ああつ、この感動を噛みしめる時間が無いとは……ああつ！ もったいない！」
「帽子屋は変態にやね」

二人は速足で建物を通り過ぎていく。まだ小さくなっていく私は、お尻を圧迫する感覚に冷汗を滲ませ帽子屋にしがみついて苦しさが終わるのを待つ事しか出来なかった。

目が覚めると知らない場所にいた。どうやら高そうなベツトに横になってい
るらしい。

「……お尻が変な感じ」

違和感を感じるが触ってみた結果、お尻には、もうモノが入ってはいないよ
うだ。しかし何というか風通しがよくなったかもしれない。閉まっていたが
自分の指が簡単に入ってしまった。

「あれ、私シミーズだ」

フリルが着いた薄い水色のシミーズを着ている。否、それしか着ていない。

「あゝ起きたにやあ」

「わ、だ、誰……」

赤紫色の髪色と三角耳をした背の高い青年がアーモンド型の瞳を、ぱちつと開けて私を覗き込んでいる。

「もう忘れちゃったの？ チエシヤだよ覚えてほしいにや」

「えっ！ チエシヤは猫よ」

「チエシヤは猫にや」

「……」

「アリスお腹減ってるにやん？ 帽子屋が何でも、ごちそうしてくれるにや」

「……にやん」

「ふにやふにやつ」

チェシヤは、ごろごろ喉を鳴らして笑うと私の横に寝転がった。

「可愛い雌猫にや」

横になって私の顔を舐めてくる。

「わ、わ……」

猫の姿の時とは違って青年の姿になっているチェシヤに恥ずかしくなり私は顔を朱く染めた。

「チェシヤは皆の猫だったけど、アリスのになっても、いいにや」

「え？」

「でも、アリスは、お家にやいかあ」

「……うん、ない」

私は自分が何故あそこに居たのか覚えていない。お酒を飲みすぎたのだろうか。思い出せない。

「じゃあ、アリスはチェシヤと番になって帽子屋の家猫にでもにやる？」

「へ……ぼ、帽子屋さんの……？ 家猫？」

「帽子屋は処女の美少女が大好きだから猫用の家を用意してくれるにや」

「びっ？ んんっ！ えっ、ええつと……一生処女でいれば良いってこと？」
「にやん？ 違うにやあ」

両腕を伸ばしてチエシヤは私の身を優しく抱いた。彼の胸の内側に抱きしめられると心臓の音が、とくとくと聴こえ心地良い。

「帽子屋は処女鑑賞も好きだけど処女摂取も大好物にや」

「……」

——……それは、どうなんだろう……？

「処女じゃなくなつて飽きて捨てるとかは……？」

「ああ見えて飼うってなったら最後まで責任もとる雄にや。安心するといいにや」

」

「そうなのかな……？」

「にやらゝ好きなだけゴロゴロして飽きたらチェシャと、お散歩に行けばいいにや。番で色んな処の猫になればいいにや」

「……チェシャと」

じつと金色の瞳を見つめる。瞳の内側で揺らめく緑色が、やつぱり綺麗だ。チェシャは、よくわからない状況で助けてくれた優しい猫青年だ。猫は自由で気まぐれな認識があるが少しの期間で絆された面もある。あと猫は可愛い。可愛いのは正義な所がある。私は猫が好きだ。

「うん。もし帽子屋さんが怖かったり飽きられたら一緒に行く」

「ふにやふにやつそうするにやゝ」

チェシャは嬉しそうに喉を、ごろごろ鳴らして私の頬を舐める。ざらざらした舌が心地良かった。

帽子屋の広いお風呂にチェシャと一緒に入る事になり、どきどきしながら彼の裸体を見上げた。細身の綺麗な筋肉質でしなやかさが美しい。猫の尻尾が生えているお尻側には赤紫色の毛が割れ目から背中に向けて生えていた。触り心地は良い。

「にゃーは熱い湯は苦手じゃ。ぬるめに浸かるにゃー」

広い湯船の隣に小さめの（チェシャ一人は余裕）湯船があり彼は、そちらの水面に丸くした手を、ちよいちよい当てて温度を確認している。私も隣にしゃがみ込み湯を触ってみる。温まるという感じでは無いなと思った。

ざらり。

チエシヤが私の首筋を舐めた。

「んっ♡」

「アリスは熱い湯に浸かるにや？」

「……チエシヤと一緒に浸かろうかな」

「ふにやふにや」

チエシヤは笑って桶で取ったぬるい湯を私に、ゆっくりとかけた。自分にもかけて、そのまま入ろうとするので止める。

「洗ってから入ろうよ」

「んにや？ にやら洗いつこするにやー♡」

「あ、洗いつこ……」

身を至近距離にして、こつんと額が当たり提案された。

「うん……」

石鹼が泡立たれ手の平に大きな泡が、ぽんつと乗る。ふわふわと泡の粒を浮かしながら、チエシヤは私の身に、ぺつとりとかぶせ。くすぐったいなと思った。

「ふふ……チエシヤも」

「うにゃ」

私も泡立たせ同じ様に彼の胸元に泡を乗せる。チエシヤの手の平が私の乳房上で優しく泡を広げ、その泡は段々と下側に垂れて身に広がっていく。

「ふぁ……」

チエシヤの唇が私の鼻に軽く当たり見上げれば楕円形の目を細めた彼の唇が唇に触れる。直ぐに舌が私の口内へと入り込んだ。少し平たく長いザラリとした舌が私の舌を、くるりと巻いて擦る。人生で初めて味わう不思議な感触だった。

「ふ……ん……う」

その舌の絡まりを感じながら互いの手の平が滑りお互いの身を洗い合う。ふにやりとチエシヤの手が私の乳房を下から持ち上げて感触を確かめた。ふにふに、ふにふにと揺るような優しい動きは徐々に甘い感覚を広げていき私の中心部が、ぷつくりと立ち上がる。泡が立ち上がった部分から、たらりと垂れた。

「んう……ん……♡」

チエシヤの親指が、そこをスリスリ擦って磨いていく。綺麗にされていく度に固さを増していく乳房の中心部。気持ち良くて不思議な気分。互いに椅子桶に座っていたがチエシヤの膝が前に進み出て私の脚の間へと入り込む。下半身に溜まる泡をかき分けて私の、ぷつくりとした太股に挟まれた固い彼の膝は泡に隠れた股へと押し込まれる。

くちゅり……

何か粘ついた音がした。

「っは……♡」

舌が抜かれ綺麗な瞳と視線が絡む。チエシヤの口が大きく上向いて、にいつと音が聴こえそうな微笑みを見せる。楽し気な、その表情に胸の中で、そわそわとしたモノが産まれた。

「あ……♡」

「アリス、洗って欲しい場所はあるかにや」

その質問は、質問ではなく決定事項だ。

「……ここ」

私はチエシヤの膝を太股で軽く挟んで腰を少し浮かせて彼の膝上を滑った。石鹸の泡で身が、つるりと滑る。

「そこが痒いのにな？」

「うん……」

頷くとチエシヤは私の尻を両手で掴み、しっかりと片膝の上に乗せて、ずにより、ずにゆりと滑らせた。

「は……あ……♡」

私の身の内側から今ある水分とは違う液体が滲み出るのを感じた。こぼり、こぼりと湧き出して白く、ふわふわの泡立ちを薄めていく。私が自ら腰を動かして始めると、チエシヤは尻から手を滑らせ私の背中を撫でて乳房に戻ってくる。むにゆりと乳房の形が変わった。先程とは違い今度は指先で私の乳首を転がし固い、そこをキュツと掴み指平二本で擦り上げた。

「ふあ♡ あ……♡」

「可愛い声だにや……」

チエシヤは私の耳を甘噛みすると舌を内側に入れ込んだ。耳の穴がチエシヤの舌で埋まる。くちくちと内側で音がして、それは脳髄に響くような刺激だった。

た。

「ひう♡ あ、あ……♡」

頭の中を犯されている気がする。股の間の滑り気が増え私の腰の動きが前後に早くなりチェシヤの喉が、ごろごろと鳴った。

「ふう……♡ ひう♡ うう♡」

汗が滲む。お風呂場で身を綺麗にしている筈なのに大粒の汗が身から滲み垂れる。私は腹の奥から感じる甘い甘い刺激にチェシヤの膝を太股で強く締め下半身を震わせた。びくびくと震える度に股の間の気持ちい場所から液体が噴き出す。

「うう♡ んあ……♡ あ……♡」

口が開き涎が垂れる。チェシヤは私の耳奥から舌を抜き取ると舌を頬に当てて涎を舐め取り、また口内へと入れ込んだ。平たい、ざらりとした舌が重なり吸い付く。にゅちと音がして舌が引き抜かれた。

「うにやゝ……このままだと帽子屋より先に入れちやいそうにや……」

力が抜けてチェシヤの身に倒れた私を抱えながら、ぬるま湯を数回かけると彼は一緒に湯に入り込んだ。ざぶんと音がして湯が外側へと零れ落ちる。頬をチェシヤの胸板に置いて、ぼうつと排水口に流れていく泡立った湯を見つめ、無言でチェシヤの舌に舐められるのを受け入れる。

ぴちや、ぴちや。

湯は、ぬるかったがチェシヤの身は温かく心地良かった。

☆☆☆以上、約5万5千文字のサンプルでした！ ☆☆☆

《2021年発行小説集・R18》サンプル約5万5千文字

発行日 2023 年 6 月 13 日

著者 いば神円(しんえん)
<https://www.pixiv.net/member.php?id=8224911>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
